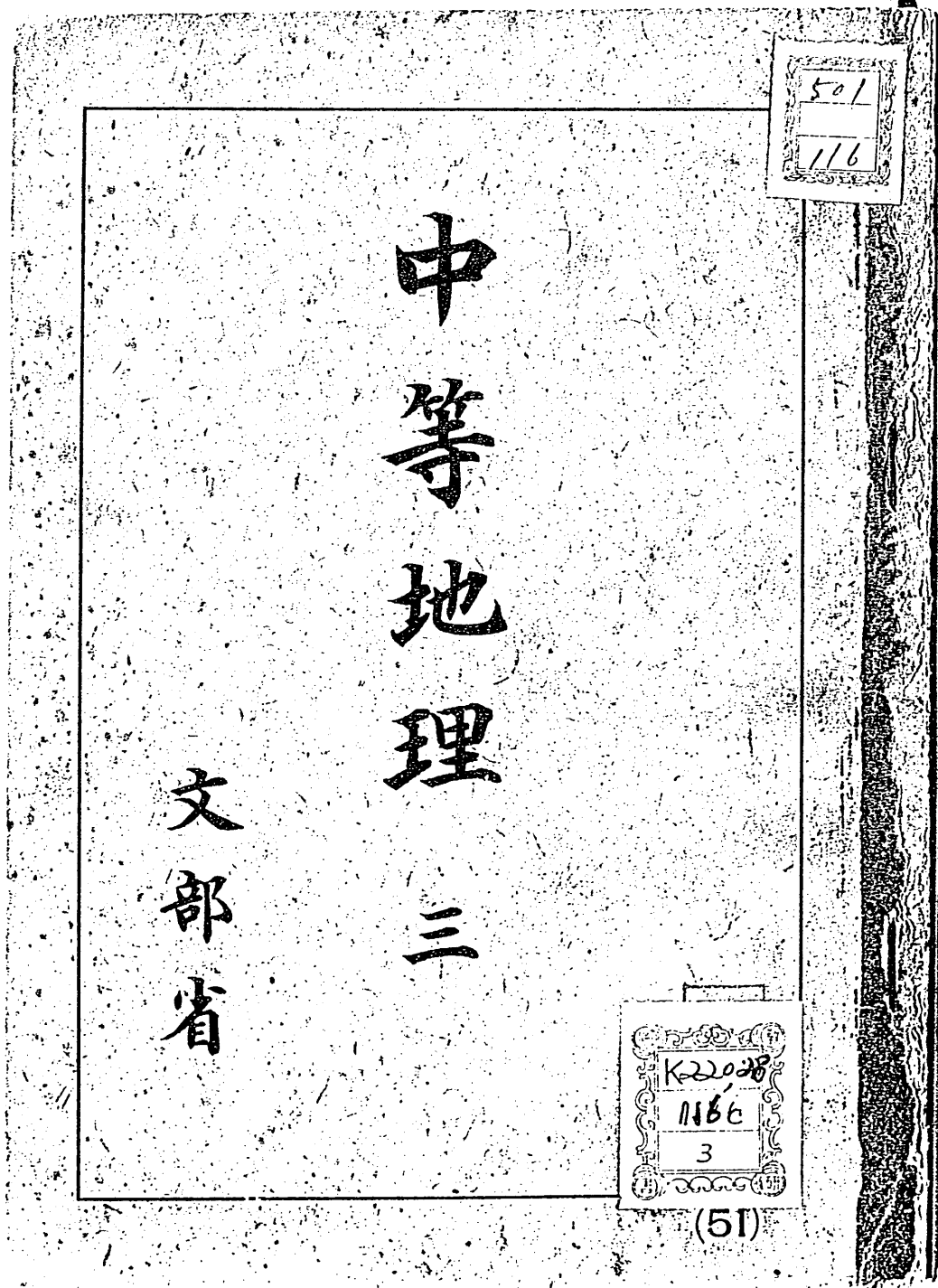




中等地理 三

文部省

K220.28

116c

3



中



學

地

理

三



文
部
省

目 録

第一 大東亞の概観	四
一 大東亞の建設	四
二 大東亞の土地と住民	六
三 大東亞の資源と交通	十
第二 滿洲・蒙疆・支那	十四
一 滿洲	十五
二 蒙疆	二十一
三 支那	二十三
第三 南方諸地方	三十二
一 インド支那	三十三
二 東インド諸島	四十
三 フィリピン	四十六
第四 濠洲、太平洋の諸島嶼、南極地方	四十九
一 濠洲	五十
二 太平洋の諸島嶼	五十三
三 南極地方	五十四
第五 インド・西亞	五十六
一 インド	五十六
二 西亞	六十四
第六 シベリヤ・中亞・北極地方	七十
一 シベリヤ	七十
二 中亞	七十四
三 北極地方	七十五
第七 太平洋・インド洋	七十七

第一 大東亞の概観

一 大東亞の建設

わが帝國を中心とする大東亞は、既に學んだ通り、世界最大の大陸と最大の海洋とに跨がり、人口も約十二億、世界總人口の過半を占める大地域である。

大東亞の諸民族は、多種多様な風土に適應して、それらの文化を育成し、中には既に數千年の昔に、すぐれた文化を作つたものも少くない。今日の主な宗教も、總べてこれら民族の中から生まれて世界に傳播した。かうしてアジア特有の文化と輝かしい傳統とは、永く保持されて來たのである。

然るに四百五十年ぐらゐ前から、歐洲諸國は次第に東亞侵略の歩を進め、更にその後、太平洋を隔てた米國の壓力がこゝに波及するに至つて、遂にアジアは數箇の獨立國を残して、他の總べてが歐米諸國に隸屬することとなつた。しかもこれらの獨立國もわが國を除けば、いづれも歐米列強の政治上、經濟上の壓迫から免れることはできなかった。

この中であつて、明治維新以來、わが國が遂行して來た大きな事件には、總べてアジア再建の實現を期する深い意義が含まれてゐる。この端緒は維新の鴻業に開け、その後の日清・日露の兩戰役、滿洲事變・支那事變及び大東亞戰爭は、いづれも帝國の存立のためばかりでなく、東亞の安定を圖るための戰であることに一貫した精神が存する。殊に大東亞戰爭は、米・英を打倒して新しい大東亞を建設し、以つて皇道を世界に光被せしめるために戰はれてゐるのである。滿洲事變以來、滿洲國の建國とその健實な發展が見られ、又、大東亞戰爭が起つて、中華民國政府の一層の更新、タイ國の協力、東インド諸島の更生、ビルマ・フィリピンの獨立、インドの獨立運動の進展などが續いて、わが國の道義的精神が、早くも大東亞諸民族の間に浸潤して行く事實を示してゐる。

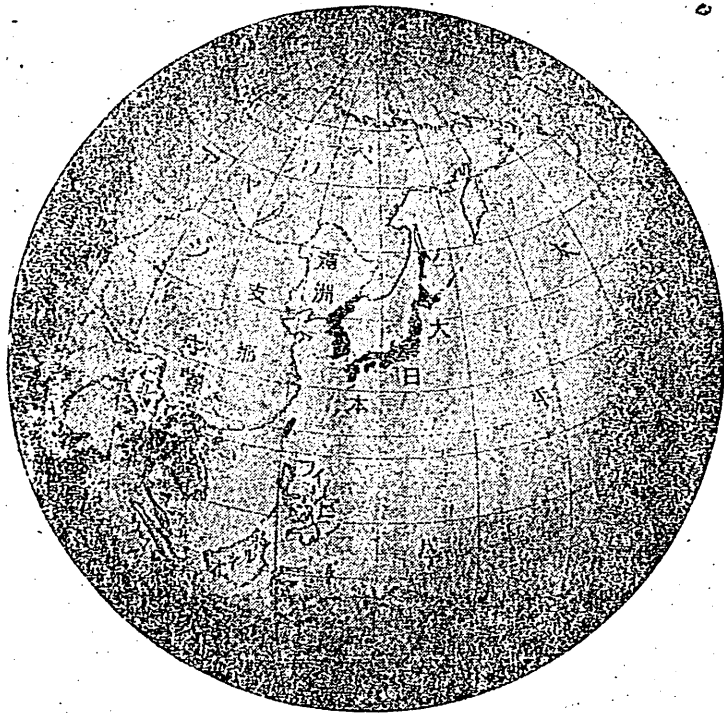
大東亞戰爭は一面戰鬪、一面建設の戰である。今やわが國は、いかなる長期戰にも耐へ得る高度國防國家體制の確立を圖ると共に、進んでは、大東亞の諸民族を打つて一丸とし、そのあらゆる資源を活用して、新秩序を建設する使命の達成に邁進してゐる。この使命を果すためには、わが國の強大な軍事力に俟たなければならないのであつて、戦力の増強は一瞬も忽せにすることはできない。われらは目前の戦況に一喜一憂することなく、各々その職域に於いて、わが國傳統の滅私奉公、不撓不屈の精神を發揮することに努めなければならない。

二 大東亞の土地と住民

大東亞はわが國を中心として大きく二つに分けられる。一つはアジヤの大陸部であり、他は太平洋からインド洋に互る廣大な海域で、そこには無數の島々や大きな陸塊が散在してゐる。

アジヤは諸大陸中、面積が最も大きく、且つ土地の高低の大規模なことに於いても、その比を見ない。しかも地體構造上、世界の諸地方への繋がりをもつてゐる。ヨーロッパはアジヤ大陸の西に連なる部分であり、アジヤとアフリカとは、アラビヤ半島の一角に於いて連結してゐる。又アジヤは北アメリカ・南アメリカとも、環太平洋造山帶によつて連絡し、アジヤの南東部は、マライの陸橋や東インドの島々によつて、濠洲に近接する。アジヤは、いはば世界陸地の中樞的軀幹とも見るべきである。

氣候的には、最も顯著な季節風がアジヤの廣い地域に影響を及してゐる。わが國を始め、滿洲や支那などの溫帶季節風帶、及びインド支那やインドなどの熱帶季節風帶が、この中に含まれる。これら季節風帶の多くの地方は、風向によつて乾季と雨季がはつきり分れるところにその特色が見られる。この季節風帶と、赤道を中心として分布する熱帶性地域の東インド諸島やフィリピンの島々を包含した地域とが、大東亞の主要部をなし、そこに大東亞の諸民族の大部



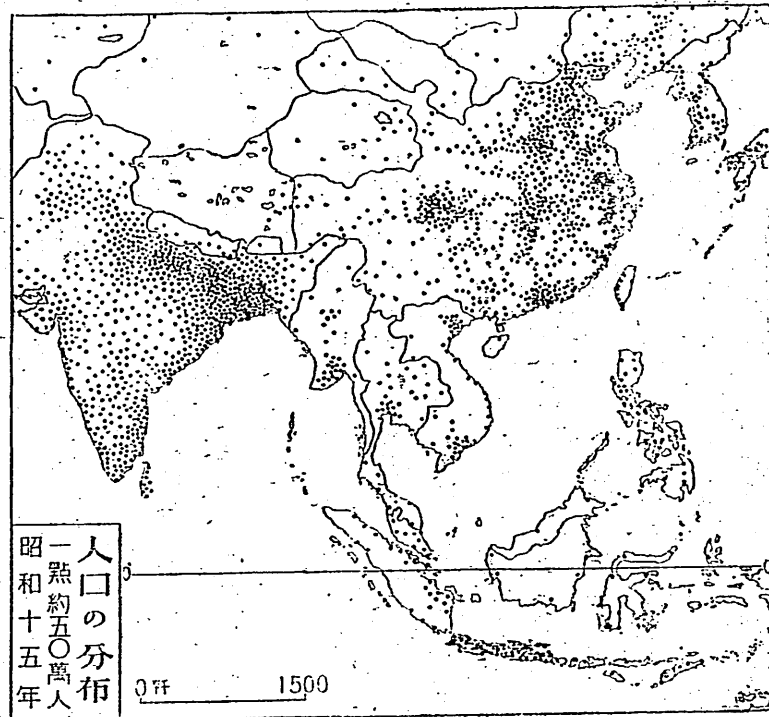
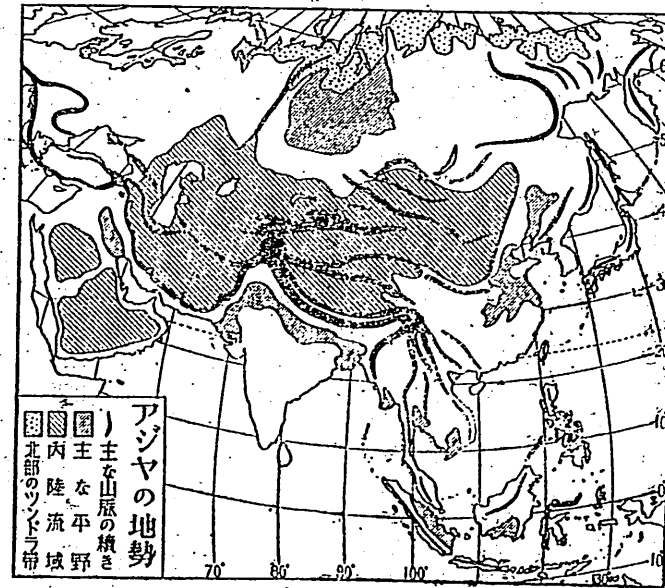
分が住んでゐる。全體を通じて農業が極めて盛んで、殊に世界に於ける米作の中心地であるから、この地域の住民の間には、米作を基礎とした生活によるいろいろの類似性が認められる。

季節風帶の北から西へかけては、大山脈や大高原の横たはる地域が廣がり、一帯に著しい大陸性・乾燥性の氣候を呈してゐる。そこにはバミル高原を中心として、四方に延びる諸山脈の間やその周邊に、蒙古高原やタリム盆地、チベット・イラン・アラビヤ等の諸高原があつて、いはゆる内陸流域が廣い面積を占めてゐる。これらの地域は住民の数が少く、人口分布の上に、季

節風帯と著しい対照を示してゐる。こゝでは牧畜が全般的に行なはれ、遊牧生活も到る所に見られるが、又、泉地・山麓・河岸等には、灌溉による農業が営まれてゐる。

しかし、これらの遊牧民族と季節風帯の農業民族との間には、歴史的交渉の深いもののあることを忘れてはならない。

満洲や蒙古の北はシベリヤで、廣い平原が中アジアへ續いてゐる。土地は南の山地帯から次第に北極海の方へ傾き、廣い森林帯が東西に連なつてゐる。寒氣が厳しく、シベリヤ鐵道の沿線や南西部の農耕地に、ロシア人が生活するほかは、狩獵を業とする少數の原住民が住むに過ぎず、人口は極めて稀薄である。海洋性の氣候と驟雨性の降雨とを特色とする太平洋の島々には、各地に原住民がそれらの生活を営んでゐるが、これらの島々は近世に



到つて歐米人の蠶食するところとなり、わが南洋群島を除く他の島々では、いづれも人口が減少してゐる。廣い海面に散在する島々の間に、類似した風俗・習慣・生活等が意外に廣く分布してゐることは、早くから船による交通の連絡があつたことを物語つてゐる。

大東亞はこのやうに龐大な海陸兩域に跨がり、その地貌は複雑であり、氣候もまた多様である。その中心的位置にわが國が位してゐることは、大東亞建設の使命と思ひ合はせて大きな意義があるといはなければならぬ。

三 大東亞の資源と交通

アジアは物産が極めて豊かで、近世の西歐諸國の繁榮は、東亞の資源に負ふところが頗る多かつた。黄金の國と喧傳されたわが國に對するあこがれが、ヨーロッパのアメリカ回航を誘起し、東亞の絹や香料を求めて、ヨーロッパ人は、はるく南阿迂回の航路を開いたといつてもよい。

アジアの東部・南部の住民は、古來農業を主な生業として來た。季節風帶の米・茶・生絲を始め、南方諸地方のゴム、滿洲・支那を中心とする大豆、インドのジュート、フィリピンのマニラ麻などは、世界に於ける獨占的な農産物である。インドの綿、各地方の煙草・甘蔗等も重要な資源である。季節風帶の農民の数は頗る多く、勞力の豊富であることは、アジアの強みであり、更に所によつては、牛・馬・水牛等の畜力も適當に使用されて、收穫高を増してゐる。

アジアの廣い乾燥地域には、羊・山羊・馬・牛等の飼育が昔から盛んであるが、羊毛の產出量の如きは必ずしも多くない。それに比べて濠洲の羊毛は、インドの綿と共に、世界的な纖維資源である。

熱帶や亞熱帶には高温多雨による密林があり、樹木の成長が速かくて、將來の開発が期待されてゐる。一方、大東亞北部の亞寒帶性の森林は、わが北方地域で見るやうに、バルブ資源としてよく適してゐる。

わが國をめぐる一帯の海域は水産資源が甚だ豊富で、わが國の漁業の發達が世界にその比を見ないのも、海洋民族としての努力のほか、かうした環境に恵まれたことが一因をなしてゐる。大東亞諸地域に於いても、今後わが國の指導によつて十分の發展を期待することができるとする。

大東亞の地下資源は、わが國を除くと、一般に十分開發されてゐない状態にあるが、滿洲・支那・南方諸地方・インド等の石炭・鐵・錫、スマトラ・ボルネオ・ジャワ・ビルマ等の石油・支那のタングステン・アンチモン等、有望なものが少くない。

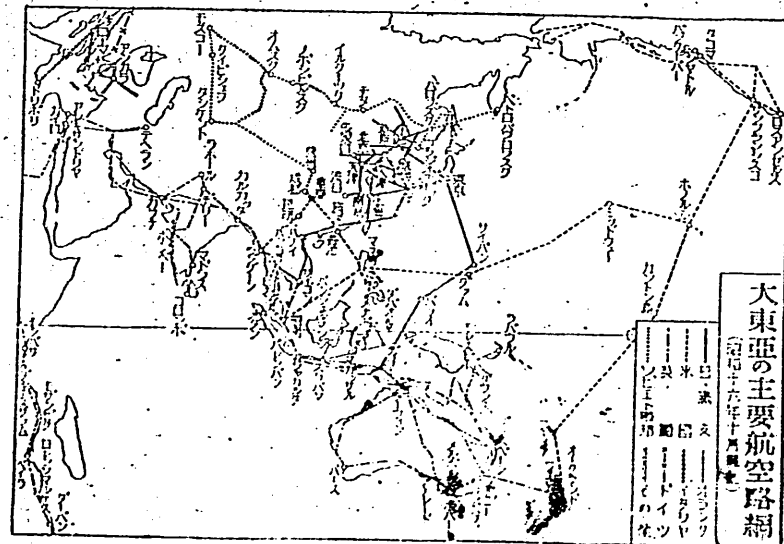
家内工業は、わが國及び支那・インド等に早くから發達し、生絲・絹織物・綿絲・綿織物・陶磁器等に獨得の製品を作り出してゐる。唯、近代工業はわが國に最もよく發達し、國土全體が、いはば大東亞の大工場ともいふべき地位にある。最近滿洲にも諸工業が勃興し、更に支那・南方諸地方にも工場の建設を見るに至つた。これらの指導は他の文化工作などと共に、擧げてわが國人の努力に俟つべきものであり、大東亞の豊富な資源は、特に大東亞の住民の福祉のために開發利用されなければならない。

わが國を中心とする大東亞の健實な發展を遂げるためには、交通の發達は不可欠の條件であ

る。強力にして優秀な海運が諸地域を連絡してこそ、始めて大東亞が經濟的に文化的に、眞に一體となることができる。しかも太平洋とインド洋とは、諸地域を結び合はせるに絶好の海域である。

海運と相俟つて、陸上交通の便も大いに開かれなければならない。現在までの大東亞の鐵道網は、季節風帶を除けば、歐米に比して著しい遜色が認められる。しかし將來は、わが國から發する大陸列車が、滿洲・支那・インド支那を貫ぬいて、一路昭南港へ達することを豫想することもできる。又、東亞から中亞・西亞へ通ずるシベリヤ鐵道を凌ぐ大規模な鐵路の建設も、わが國人によつて既にもくろまれてゐる。

一方、海運や鐵道と並んで、大東亞諸地域を統一する紐帶として、航空交通の將來は甚だ重要である。



ある。分布圖でわかるやうに、從來わが國を除く大東亞の主な航空事業は、歐米人の經營に委ねられてゐた。しかし既に大東亞戰爭前、東京から臺灣・南支を経てインド支那へ達する定期航空が始められ、又、遠く南海のチモール島への航空路も開かれてゐた。なほ戦時下の異常な發達を見ても、わが國が中心となつて、將來、大東亞の航空の一大革新を見ることは疑ひのないところである。

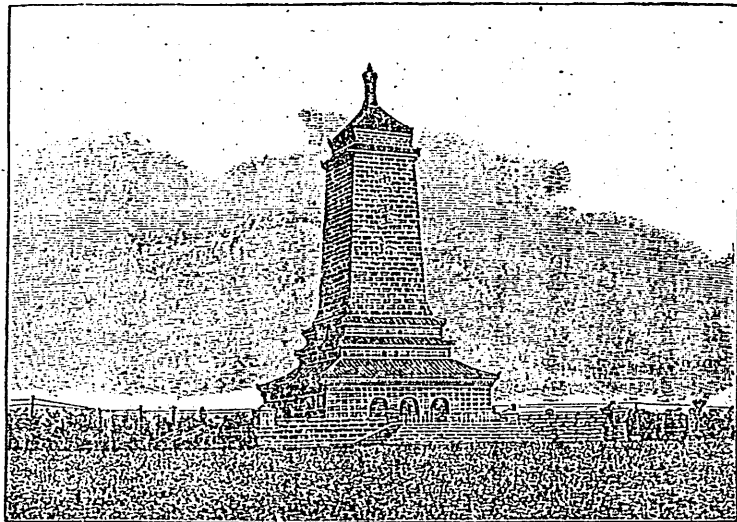
第二 滿洲・蒙疆・支那

滿洲・蒙疆・支那は、大東亞のうちで最もわが國に近接し、歴史上は固より、經濟・文化その他種々の方面で、わが國との關係が極めて深い。政治的に日・滿・支は、いはゆる不可分の關係によつて固く結ばれてゐる。

これらの地域は地勢上、アジアの東部斜面を占め、蒙疆を除くと、一方が太平洋に面してゐる。滿洲から支那に跨がる南北の地域的な廣がり、緯度の上から恰もわが國の樺太から臺灣までと對比することができ、相互の地理的事象の比較・考察に都合がよい。但し、わが國が列島及び半島から成り立つてゐるのに對し、これらは大陸の國であり、しかも横幅の甚だ廣いことが大きな相違である。

氣候上、日・滿・支は、概ね溫帶季節風帶に屬してゐるので、産物や住民の生活などに於いて、三者の間に著しい共通性が認められる。しかも人種の上からも甚だ近似し、文字も共通のものを使用し、宗教や文化にも、似通つたものがあることを考へるならば、お互がいはゆる地縁的にも血縁的にも、深く結ばれる必然性があるといはなければならない。

新京の忠靈塔



一 滿 洲

わが國と滿洲とが親子のやうな間があることは、日・滿の歴史と滿洲の建國事情に顧みれば、おのづから明らかである。大東亞戰爭に先立つこと九年、大東亞新秩序建設の先驅として、滿洲の建國が成り、舊秩序維持に汲々たる米・英等の反對を敢然と押し切つて、興亞の大業の第一歩が踏み出された。當時の三千萬の民衆は、始めてこゝに民族協和の樂土を見出し、わが國の大精神は、期せずしてこの國に顯現せられた。

わが國と滿洲とは朝鮮北境に於いて地續きて接し、かれの保全是、直接わが國防に重大な關係があり、ひいては東亞全體の安危に係はるのである。滿洲は實にわが陸の生命線といふことができる。

日・滿兩國は、その地理的事情によつて、國防上は固より、産業・交通等の諸部面に於いても、互に相補ひ相助け合つて、始めて兩者の安定が保たれる。随つて滿洲の建國以來、わが國は國家を擧げて、この國の發展のために懸命の助力を致し、滿洲もまた、その總力を傾けて、國家の理想達成に萬全の努力を拂つてゐる。

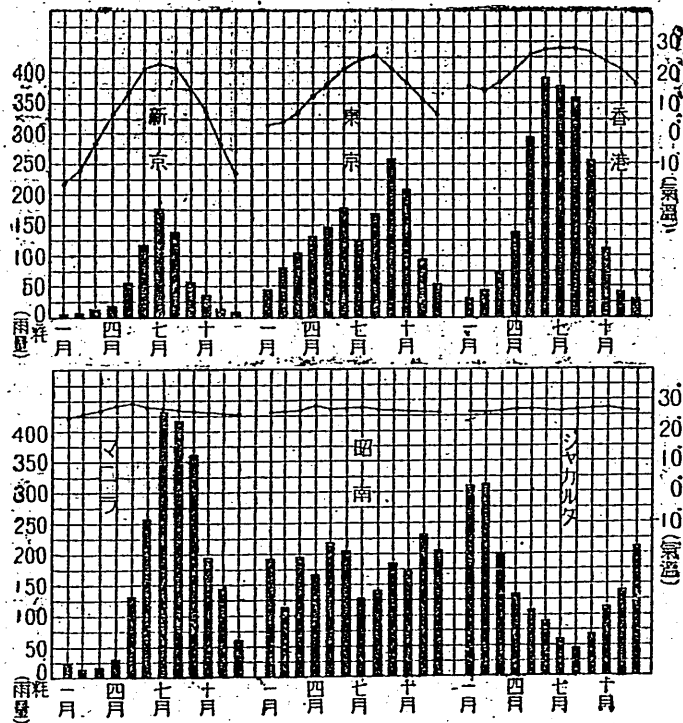
滿洲の境域は、殆ど大部分が陸の國境によつて圍まれ、殊にシベリヤと外蒙古との境界線が極めて長いことに注意しなければならない。

自然と産業 滿洲の海に臨んでゐる部分は、全國境線の僅か一割五分に過ぎず、随つて内陸の國といつても差支ない。この國が大平原の國であること、大陸性の氣候を呈することなどは、既に學んだ。

緯度上の位置は、略々わが國の北方地域に對比できる。しかし夏には比較的に高温となり、且つ雨量にも相當に恵まれてゐるので、農耕は甚だ盛んである。

大豆が全滿に普及した作物であるのは、この國の風土によく適するからである。小麦は、割合暴雨で冷涼な北滿に廣く作られ、高粱は南滿一帶に多く産する。又、粟や玉蜀黍の栽培も行なはれる。用途の極めて廣い大豆は、わが國を始め支那や、嘗ては歐洲へも大量に輸出され、今もこの國の財源の基礎をなしてゐる。粟は特に朝鮮へ多く送られる。このやうにして、滿洲、

東亞各地の氣温と雨量



は東亞の一大穀倉の役目を擔つてゐるといつてよい。

わが國人の努力の結果、高緯度の北滿でさへも、米作が行なはれるやうになつたが、冷害を受けることも少くない。南部の綿の栽培も近時注目されてゐる。

冬は氣温が著しく低下するが、比較的晴天が多く、雪上や氷上の運搬ができるので、森林の伐採や農産物の輸送に大切な時期である。

農家は一般に廣い耕地を所有してゐる上に、地力の維持にも必要であるから、わが開拓民を始め一般農民に家畜の飼養が奨励され、又、内地に見られないやうな大型の農具も使用されてゐる。

地下資源と近代工業 建國以來、地下資源の開発、近代工業の勃興が目ざましい。殊に建國十周年を迎へた昭和十七年度からは、第二期五箇年計畫に従つて、農産食糧の増産のほか、鑛工業方面にも新しく重心がおかれるに至つた。

わが國の地下資源は種類こそ多いが、一、二のものを除いて數量の乏しいうらみがあるのに對し、滿洲では、比較的大量に産出するものが少くないところに長所がある。特に石炭と鐵はその代表的なものといふことができる。唯、石炭が一般に良質であるのに比べて、鐵鑛は東邊道方面のものを除けば、大部分が貧鑛である。しかもわが技術は、鞍山の昭和製鋼所の如く、みごとにそれらの貧鑛處理に成功を収めてゐる。滿洲炭は早くから開發された撫順炭田のほか、滿洲事變以後新たに南滿の阜新・北票・西安、東滿の鶴崗・密山・三姓、北滿のジャライノール等の新興炭田を加へ、出炭量は増加の一途をたどつてゐる。

油母頁岩から得られる石油も注目すべきもので、その産額は世界第一位を示し、大東亞戰爭以來、わが國防上極めて重要になつた。又、石炭の液化事業にも力が注がれてゐる。礬土頁岩やマグネサイトなどの世界的大鑛床もあり、アルミニウム・マグネシウム等の輕金屬工業の將來も洋々たるものがある。

鴨綠江や松花江には極めて大規模な水力發電所が建設され、その電力は從來の火力によるも

の、並びに豊富な石炭の活用と相俟つて、奉天を始め、各地に種々の近代工業の發達を促してゐる。即ち、製鐵・製鋼・輕金屬・人造石油・豆油・豆粕・麥粉及びバルブ製造などのほか、硫酸・ソーダ等の化學工業も興り、更に航空機・自動車・車輛・兵器等の國防工業も驚くべき發展を續けてゐる。かうして大東亞戰爭下、わが國に近接する滿洲の重要性は、愈々高まつてゐることを見逃してはならない。随つて日・滿兩國間の交通は、陸・海・空の三方面に互つて極めて活潑となり、滿洲國內の交通網の發達と相俟つて、使命の遂行に遺憾なきを期せられてゐる。

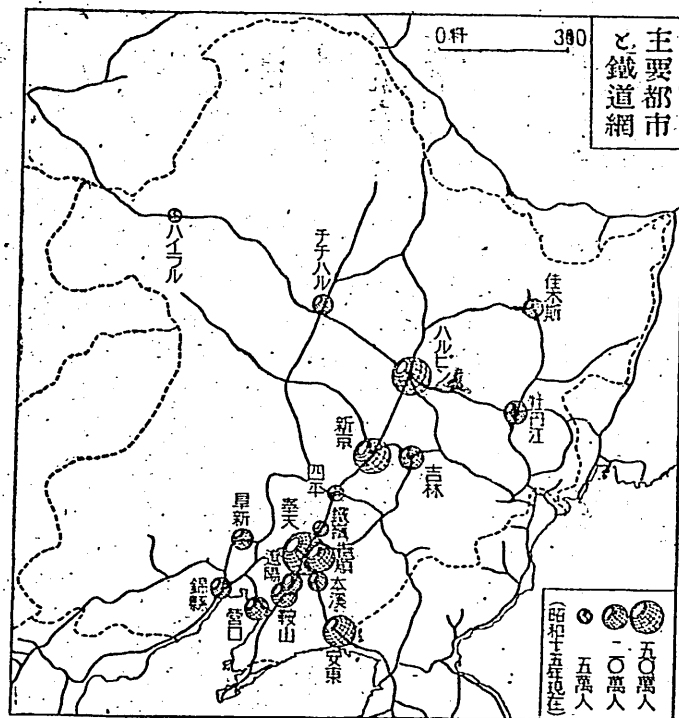
民族の協和 滿洲には日・滿・漢・蒙等の諸族が住んでゐる。滿洲族は嘗て清朝を興したのであるが、その數は少く、主に東部の山地に住んでゐる。漢族は早くから滿洲へ入り込んだが、殊に日露戰爭以後、わが國による

治安維持の確立に伴なつて、移住する者が激増し、滿洲住民の大部分を占めることになつた。建國以來、僅か十年にして早くも人口四千三百萬を數へるに至つたのも、北支那方面から、安



滿洲の民家

住の地を求めて樂土滿洲へ移つて來た漢族によるところが多いのである。かれらは故郷の北支



那に於けるやうに、土塼に圍まれた中に、泥で塗り籠めた家造つてゐる。蒙古族は主として興安嶺以西の草原地方に住み、遊牧生活を行なつてゐるが、近時漢族と接觸する者の中には、定住して半農半牧の生活營むやうになつた者もある。

半島人は早くから國境に近い地域へ移り住んだが、殊に明治初年の北鮮の飢饉以來、その數が増加した。東滿洲一帯に米作が興つたのも、その努力の現れてある。

てゐる。主に關東州や舊滿鐵附屬地に居住して、交通・鑛山・工業その他、滿洲に於ける指導

向な業務に従事して來たが、建國以來、活躍の範圍が益々廣まつてゐることはいふまでもない分布圖に見られる交通の中心地に主として發達する主要都市には、各地にわが國人が多く住んで活躍してゐる。

一方、民族協和、産業の振興並びに國防の強化などの見地から、北滿や東滿を中心とする一帯の地域に、わが國から拓土の入植が行なはれてゐる。この内地人の移住は、日・滿兩國の重要國策の一つである。即ち、三十年計畫として、集團開拓民は昭和三十二年までに百萬戸、五百萬人、青少年義勇軍は、同三十二年までに百五十萬人の入植を目ざしてゐる。この目的が達成された暁には、滿洲國全人口の約十分の一をわが内地人が占めることになり、日滿一體化の實は愈々擧るのである。

二 蒙 疆

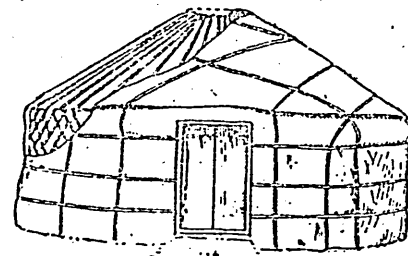
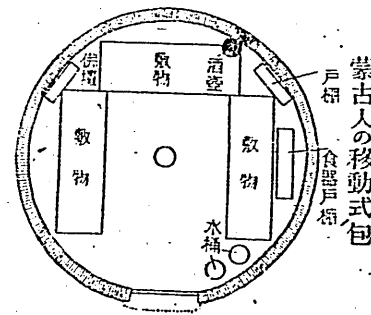
蒙疆は大體内蒙古の地方で、政治的に支那の一部となつてはゐるが、わが國と特殊な關係のあることを注意しなければならない。住民は蒙古族と、支那本部から來住した漢族とが主なのである。

この地方の住民は、永い間支那軍閥に苦しめられて來たが、昭和十二年、支那事變の勃發に

際し、皇軍の蒙疆作戰に呼應して立ち上り、各地に自治政府が作られたが、昭和十四年九月には、それらが合同して、張家口に政廳を置く蒙古聯合自治政府が誕生した。この政府は防共・民族協和・民生向上の三項目を施政の目標として掲げてゐる。かうして蒙疆は、新しく東亞の一翼たる使命を擔つて發足することとなつた。

土地と住民 蒙古族は喇嘛教を深く信仰し、各地に壯大な喇嘛廟があつて、かれらの住む簡単な家屋とは著しい對照を示してゐる。

蒙古族の多くは古來、乾燥する高原に水草を追つて移動する遊牧生活を営んでゐる。羊・山羊・馬等を飼ひ、羊毛・皮革・肉・乳等の畜産物が、かれらの大切な生活資料であるばかりでなく、家畜の糞は燃料になる。しかし住民の一部は定住して農業を営み、麥類・粟・高粱・阿片等を作つてゐる。羊毛はなほ産額も少く、品質も劣るが、蒙疆は滿洲や北支那と共に、東亞に於ける牧羊の適地であるから、飼育の改良によつて、將來重要な資源としての活用



を期待することができ。

漢族は、北支那に近い南部の諸盆地や五原地方へも進出して農耕に従事し、この地方の食糧を完全に自給してなほ餘力がある。氣候が大陸性で夏の氣溫が高く、僅かながら降雨もあるので、農耕ができるのである。この地方には少數の回教徒も住み、主に除商として、支那の北西方面との交通・貿易に従事してゐる。

大同の石炭と龍烟の鐵礦とは蒙疆の最も大切な礦産である。大同炭田の埋藏量は數百億噸と見積られ、東亞有數の大炭田で、火力も強い。龍烟の鐵礦は埋藏量數億噸といはれ、割合品質もよく、鐵石はわが國と北支那との製鐵所で使はれてゐる。

三支那

歴史上わが國と最も深い關係にある支那は、明治四十五年、國號を中華民國と改めて、共和制をしき、國民政府の統治するところとなつた。日・支兩國は互に隣邦として、あらゆる方面で善隣の誼を結ぶべき間がらである。然るに滿洲事變から支那事變へと、日・支間に紛争が起つたのは、米・英等の策謀があつて、心なき支那人に排日・抗日の空氣を煽動したためである。幸ひにも昭和十五年三月以降、國民政府は更新した。奥地には重慶政權が、米英を恃んで今

なほ抗戦を続けてはゐるが、平和を回復した地方の住民は、更生の意氣に燃え、樂土の建設に力を盡くしてゐる。日・支兩國は今や同盟を結び、東亞の中核體として、善隣友好・共同防共・經濟提携の實を擧げ、滿洲と共に、いはゆる共生同死、大東亞戰爭の完勝に向かつて邁進してゐる。

支那はその主要部をなす支那本部と、その他の邊境地方とに區別することができ、兩者は地勢・氣候等の自然條件のほかに、民族・生活・政治組織等に於いても相違するところが多い。支那本部は更に北支那・中支那・南支那に大別し、それらの特色がある。

自然環境 支那は廣大な大陸國で、地勢が大規模であると共に、又、複雑である。地勢の上から、西部高地と東部低地とに大きく分けられる。

西部高地は、高峻な山地や廣大な高原・盆地から成り、パミル高原から東に延びた崑崙山脈を挾んで、南にチベット高原、北にタリム盆地があり、又、北部には蒙古高原が横たはつてゐる。西部高地は東へ行くに従つて次第に高度を減じながら、東部低地に移り、その間に雲貴高原・四川盆地・渭水盆地・北支那臺地等がある。

東部低地には、北部に廣い北支那平野があり、中部には揚子江下流の平野、及び中流の湖廣・江西兩盆地があり、南部には珠江下流の平野などがあつて、支那に於ける最も産業の盛んな地方となつてをり、人口の大部分もこれらの地域に集つてゐる。黃河下流平野は、漢族のいはゆる中原の地で、渭水盆地と共に、屢々支那の政治の中心地となつた。揚子江下流の平野は頗る豐沃な地帯で、江浙稔れば天下飢えずの譬がある。中・南支の河川は、北支那の場合と違ひ、一般に水量が豊富で、農業や交通に大きな影響を與へてゐる。

支那の氣候は、地域の廣大なのに比して、比較的單調で、わが國の多様性とよい對照をなしてゐる。中・南支の沿岸を除き、概ね大陸性の特色を示し、冬は低溫であるが、夏は内陸に於いて相當の高溫を呈する。支那本部は季節風帶に屬し、夏の雨季と冬の乾季とに分けられる。北支那は大體溫帶性で、夏は滿洲に似てかなり高溫となる。南支那の沿岸地帯は亞熱帶性で、中支那はこれらの中間の性質を示してゐる。雨は南部に多く、北に行くにつれて次第に減少する。特に北支那に於いては、雨の少い年は飢饉となるおそれがある。西部高地は著しく大陸性で、降水量も極めて少く、内陸流域では遂に沙漠となつてゐる。

農業と牧畜 風土の相違に従つて、住民の生業にも、産物の種類にもおのづから別がある。支那本部では農耕に主力が注がれ、邊境地方では牧畜が主となつてゐる。麥類は北支那平野が中心であるが、米は揚子江流域を主産地としてそれ以南の各地で作られ、綿は北支・中支に互つて栽培される。北支那では、南滿洲に類似の畠作が行なはれ、麥類のほか高粱・粟・大豆・

玉蜀黍・綿等を主産物とし、黄土の恵みによつて、夏の雨さへ十分であれば常に豊作となる。中・南支はわが中央地域及び南方地域に似て、米のほか、茶・生絲・麻・甘蔗等を多く産出する。なほ四川盆地は氣候にも割合恵まれて、各種の農産物を産し、一農業區をなしてゐる。

支那に於ける各種農産物の生産高はばくだいてあるが、國內の消費が多いので、綿・茶等を除けば、平年でも自給が困難なのは大きな缺陷である。農耕の方法にも國民の生活にもまだ改善の餘地が多い。



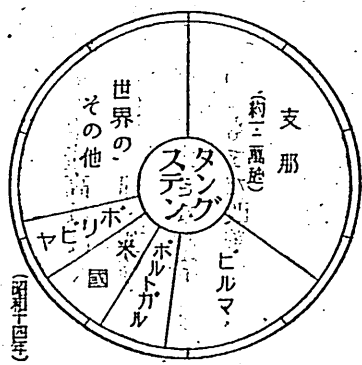
北支那の海岸地帯に於ける製塩は、氣候や地形に恵まれて、産額が多く、關東州や南滿洲産は馬・驢・騾、中・南支では水牛・黄牛が多く、豚や鶏の飼育も一般によく普及してゐる。山東牛は青島に集められてわが國へも送られる。

北支那の西部山地及び邊境地方は、蒙疆と似て、羊・山羊・馬・牛等の放牧が行なはれてゐる。家畜の飼育は支那本部の各農家に盛んで、北支那で

のものと共に、東亞の工業資源として極めて重要である。

地下資源と工業 支那の地下資源のうち、石炭は最も豊富で、埋藏量は二千億噸以上と見積られてゐる。北支那に最も多く分布し、殊に山西省の炭田は世界有数のものである。鐵鑛の埋藏量は、最低見積り六億噸といはれ、主として揚子江中流南岸に産し、大冶・桃冲が昔から有名である。山西省や山東省にも産地がある。近時海南島に於いて、わが國人の手によつて、極めて有望な石碌・田獨等の鐵山が発見され、採鑛が着々進められてゐる。國防資源として大切なタングステンは、江西・廣東の兩省に多く、その産額は世界の首位を占め、湖南省を主産地とするアンチモンも世界的である。

このやうに天然資源は豊富であるが、技術・資本・交通等の條件が伴はない上に、外國の製品に壓倒されて、工業は一般に振るはない状態にあつた。家内工業は現在なほ重要な地位を占め、織物・陶磁器・漆器・紙・食料品等の製造が、各地に行なはれてゐる。しかし近年上海を中心とする揚子江沿岸、及び天津・青島・廣東等には、紡績・製粉・煙草・マッチの製造等の近代工業が興り、又、漢口附近には桐油工業が盛んである。特にこの國の紡績工業に對して、わが



國の資本と技術とは、從來から目ざましく進出してゐた。重工業は舊國民政府の積極的獎勵にも拘らず、一部の製鍊のほか見るべきものが殆どなかつた。

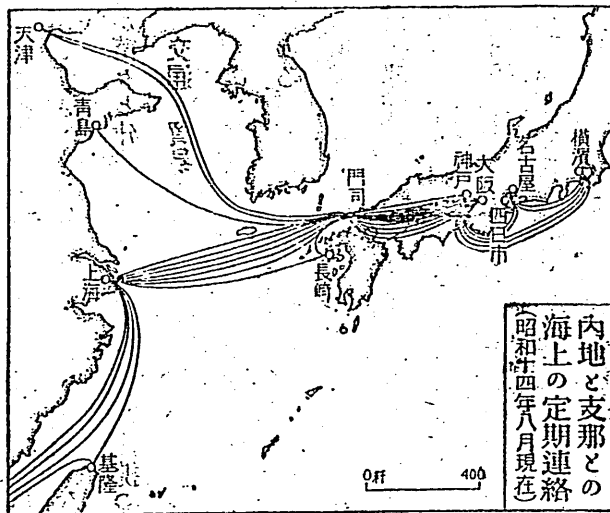
大東亞全體から考へて、將來、この國の豊かな天産と大きな勞働力とが、諸工業の發達にとつて重要な要素となることが期待される。既に北支・中支方面に於いて、日支合辦の特殊會社が續々と建設せられ、日・滿との提携のもとに新たな發足をなしてゐる。

交通・貿易の特色 昔から南船北馬の語があつて、北支那では馬・驢・騾・駱駝等が、物資の運搬に使用され、中・南支では船の便が多い。又、一輪車や轎などの特殊なものも利用されてゐる。

鐵道は、西部高地には殆どこれを缺いてゐるが、東部低地には漸次發達し、京山・京漢・粵漢・津浦等の諸線があつて、南北に通ずる幹線となつてゐる。なほこれらと連絡する東西の線として、隴海・浙贛等の諸線がある。

揚子江は本・支流共に水運が極めて盛んで交通の大動脈をなし、珠江がこれに次いでゐる。名高い大運河は荒廢が甚だしいが、南部では今なほ大いに利用されてゐる。

國土が遼大なのに鐵道が十分に發達してゐないので、その不便を補ふために、近時航空交通が急速な發達を遂げ、主要都市を結ぶ航空路が開かれたが、それらは主に外國の經營によるものであつた。



日・支間の交通は日・滿の場合と同様に、相互の緊密な提携の上から、今後海・空共に、高度の發達が必要であることはいふまでもない。上圖によつて、從來、兩者の海上連絡の極めて便利であつたことがわかる。

支那に於ける主な港は、北から天津・青島・上海・廣東・九龍等が挙げられ、それらの商圏をもつてゐる。中でも上海は揚子江沿岸一帯を後背地とし、世界的な大商港として發達し、香港と共に中繼貿易も極めて盛んであつた。

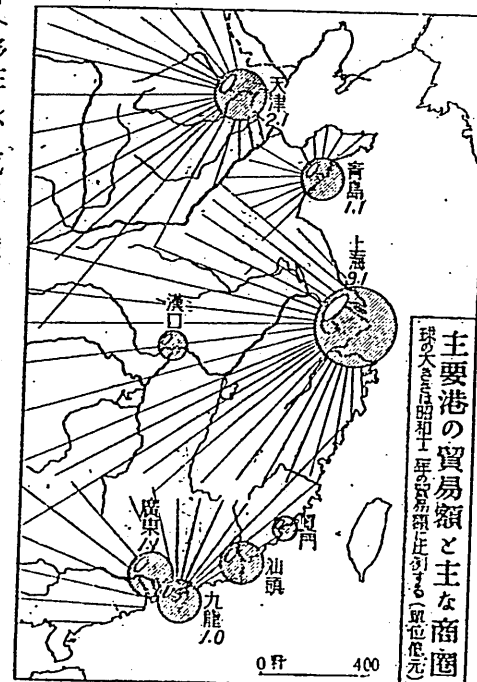
貿易品は、從來主に地上資源や地下資源を輸出し、諸製品を輸入するのを通例とし、この國の産業をよ

く反映するものであつた。

住民 支那の總人口は約四億五千萬といはれ、その大部分は漢族で、支那本部を中心とし

て住んでゐる。東部低地に最も多く集つてをり、渭水盆地や四川盆地がそれに次いでゐる。中でも、黄河及び揚子江の下流地方は人口密度が極めて高く、主な都市も殆どそこに見出される。これに對し、邊境地方は蒙古族・トルコ族・チベット族等の居住地である。地勢・氣候等の條件も悪く、人口の數は少い。

漢族は古來、いはゆる塞外民族によつて、屢々武力的征服を受けたが、文化的には、却つてこれらの民族を同化した。漢族のこの強大な同化力は、その諸地方への發展力と共に特に注目を要する。即ち、人口過剰の地方から國外へ移住し、或は出稼きをする者が多く、北支からは滿蒙へ、南支からは主に南方諸地方へ、又、嘗ては北米・南米・濠洲・南阿等、世界到る所に發展し、それ〴〵根強い生活的地盤を築き上げてゐる。これら國外への移住者が、いはゆる華僑である。かれらは一般に體力が強健で、勤勞や低い生活にもよく耐へ、氣候に對する馴化性が



強い。殊に南支に長じてゐるので、各地に於ける經濟的勢力は輕視することができない。

土地が廣く、各地の事情が異なるところから、言語・風習・生活様式等に、地方的相違が著しく、交通の不便と相俟つて國內の統一を困難にしてゐる。同じ支那本部の漢族の間でも、各地各様の雜多な方言があつて、互に言語が通じない有様である。教育の普及が後れてゐるのも、その一つの大きな原因である。しかし大きく考へて、北支と中・南支では、種々の方面から、大體の區分があることは注意すべきである。

宗教にも種類が多く、支那本部では、佛教のほか、道教・回教・喇嘛教等があり、なほ種々の民間信仰が廣く行なはれてゐる。又チベットや蒙古では喇嘛教、新疆では専ら回教が行なはれてゐる。

第三 南方諸地方

インド支那・東インド諸島・フィリピンを含む南方諸地方は、アジア南東部の赤道を中心とする地域で、半島や諸島嶼から成り立ち、その全域が熱帯に位してゐる。東京から直線距離で凡そ六千軒の圏内にはいつてをり、海路並びに空路によるわが國との連絡には便利な位置にある。

南方諸地方に於いては大東亞戦争以來、わが國の力によつて、米・英・蘭等の勢力が一切拂ひのけられ、各地方の住民は、今や積極的に新秩序の建設に協力してゐる。

この地方は早くからわが國と歴史的交渉のあつた地域で、江戸期になつて、鎖國政策が採られるまでは、八幡船や朱印船が盛んに往來し、各地に日本町が建設されてゐたことはあまねく知られてゐる。明治以後は、わが國人が再びこの地方へ進出し、幾多の困難や障礙を突破して、各地に農園を拓き、鑛山を開發し、水産業を營み、或は貿易に従事した。これら先驅者の勞苦は、今日新しい意義を以つて想起すべきである。

地體構造の上から見て、南方諸地方はわが國と連繋のある地域で、大東亞縁海の弧狀山脈は

臺灣からフィリピンへ、更に東インド諸島へと續いてゐる。火山帶・地震帶・海溝等も、この列島に伴なつてゐる。一方インド支那方面と東インド諸島とも構造上の繋がりがある。

各地共、資源が極めて豊かで、大東亞全體から見ても重要なものが少くない。中でも東インド諸島やビルマの石油、マライや東インド諸島のゴム・錫、インド支那の米、フィリピンのマニラ麻などは代表的なものである。

一 インド支那

インド支那は支那とインドの中間にある一大半島で、その中央からマライ半島が長く南へ突出して、緯度で十度以上に及んでゐる。古くから支那とインドとの間には、歴史的・民族的關係が深く、又この地方は太平洋とインド洋とを結ぶ南海航路の要路に當つてゐるので、わが國を始め、近世に於ける諸外國との交渉の淺くないことなど、總べてこの地方の地理的位置に負ふものである。

地勢上、インド支那山脈が數條に分れて本地方を南北に縦走し、中央の一脈はマライ半島へ續き、西方のものはインド洋中のアンダマン・ニコバル諸島を経て、更にスマトラ方面へ連絡してゐる。河川はいづれも山脈の方向に従つて南流する。主な川にはソンコイ・メーコン・メ

ナム・サルウィン・イラワジ等の諸川があり、多くは下流に廣い三角洲を作つてゐる。

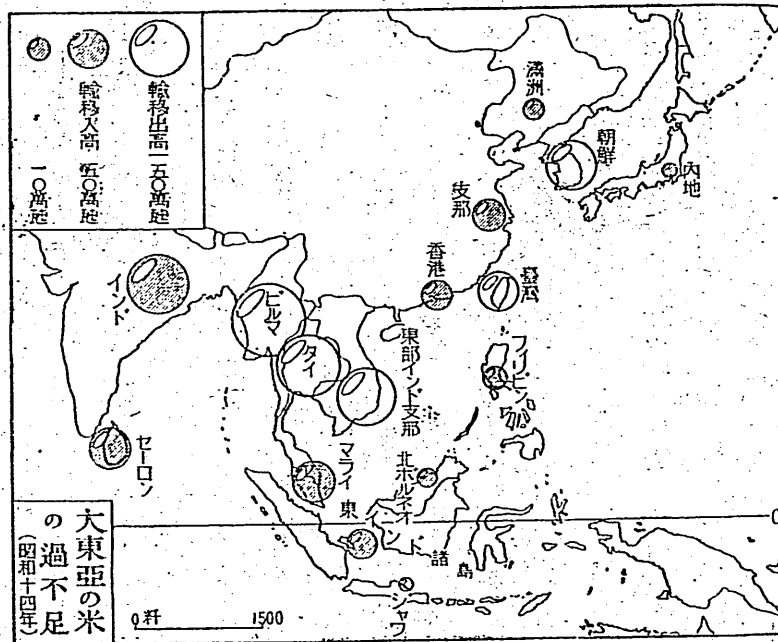
半島の内部は山地のために幾つかの地域に分れてゐるが、これらの自然的區分はおのづから民族の分布に影響を與へてゐる。東部の安南人・カンボジャ人、中部のタイ人、西部のビルマ人などはその主なもので、文化的にそれらの特色を示してゐる。

地理的に見て、東部インド支那・タイ・ビルマ・マライの四區に分けられる。マライを除けば、全體が熱帶季節風帶に屬し、米作が各地共極めて盛んであることや、住民の殆ど大部分が佛教を信仰することなどのほか、三者の間にはいろいろの共通性が認められる。唯、マライは自然・物産・行政等に於いて、半島主部と異なる點が少くない。

本地方は全體から見て農産・鑛産が甚だ豊かであるが、殊に人口に比べて米の産額が非常に多く、輸出が盛んで、大東亞の米倉ともいふべき地位にある。

東部インド支那、この地方は佛領インド支那、もしくは佛印とも呼ばれる。支那事變に際しては、いはゆる援蔣路として、北部のハイフォンからハノイを経て南支那の昆明に達する滇越鐵道と、新たに造られた自動車道路が利用された。大東亞戦争前後から、この地はわが軍の重要な基地となつてをり、わが國とは國防上、經濟上頗る緊密な關係にある。

臺灣から廣東を経て政治の中心地ハノイまでは、その距離約一千九百浬、東京からは四千浬



である。飛行機で東京を朝立てば、翌日夕方にはハノイの地を踏むことができる。南部の中心地サイゴンも航空の要地となつてゐる。

行政上、トンキン・安南・交趾支那・カンボジャ・ラオスの五地方から成つてゐるが、住民は安南人が大部分で、トンキンから安南・交趾支那にかけて住んでゐる。安南人は多分に漢文化の影響を受けてゐる。カンボジャ地方に住むカンボジャ人の祖先は、嘗てアンコールワットを建立したクメール族である。

フランス人は最近六、七十年ぐらゐ前から、この地方を領有したのであるが、その後の經營には熱心でなかつたので、

一般に開發が進んでゐない。随つて將來この地方の發展には、各方面ともわが國の指導に俟つべきものが多い。

土地が南北に長いので、北と南では氣候も少からず違つてゐる。米作は各地に盛んであるが、北部のトンキン米、南部のサイゴン米は特に名高い。殊にメーコン川の三角洲を主産地とするサイゴン米の輸出量は甚だ多く、華僑が取引きの實權を握つてゐる。ゴムや綿の栽培は南部の平野で行なはれ、將來も有望である。

鑛産も將來性が大であるが、現在のところ採掘の最も盛んなのは石炭で、特にトンキン地方から産する良質の無煙炭は有名である。わが國は早くから特殊工業用或は煉炭用として、いはゆるホンゲー炭をこの地から輸入してゐる。

タイ(泰) タイは從來からわが國の親善國であつたが、同盟國として緊密な關係になつたのは、大東亞戰爭以來のことである。この國は戰爭勃發と共に、進んでわが軍事行動に協力し、わが國と攻守同盟を結んで、米・英に對して宣戰を布告した。永い間、英・佛二國の勢力に挟まれて、獨立を維持するに苦しんだが、今は完全な獨立國の面目を發揮することになつて、更生の意氣が揚つてゐる。

三方を山脈で圍まれたこの國は、インド支那中央部の大盆地の觀さへある。メナム川流域の

大平野は極めて肥沃であり、住民の八割餘はこの平野を中心として農業に従事してゐる。特に米の栽培が盛んで、米作地は耕地の殆ど大部分を占めてゐる。米のほかは、マライ半島部の錫・ゴム、山地のチークが重要である。最近マライの鐵産地の一部も、この國の領土に編入された。タイの輸入品は、これまで綿製品・食料品・金屬製品等が大部分を占めてゐたが、これらは今後、大部分わが國へ依存することになるであらう。

住民はタイ族で愛國心が強く、舊國名シャムを廢し、新たにその民族名を取つて、タイと改稱した。佛教を深く信じ、各地に壯麗な寺院がある。國王は國教としての佛教の教主でもある。華僑の数は甚だ多く、商業上絶大な勢力をもつてゐる。

バンコクを中心として鐵道も割合よく發達し、昭南への直通列車も運轉されてゐる。この地はインド支那全體から見ても、陸上並びに航空交通の要地に當つてゐる。

ビルマ(緬甸) ビルマは過去八十年間、英國の壓制に苦しんで來たが、大東亞戰爭によつて、わが國の指導のもとに、始めてアジア人のアジアとしての自覺をもつて立ち上り、昭和十八年八月には、遂に獨立の榮譽を獲得することができた。インド及び支那との國境に戰雲の立ち籠めてゐる中に、ビルマ人は銳意國內體制の確立に邁進してゐる。

インドとの國境にはアラカン山脈が縱走し、東部にはレヤン高原が廣がつてゐて、その間に

豊沃なイラワジ川流域の平野が挟まれてゐる。四月から九月までは南西季節風によつて雨季となり、特に山脈の西斜面には降雨量が多いが、中部のマングレーを中心とする地方は割合雨が少い。

ビルマもタイと似て、住民の約八割は農業に従事してゐる上、米が主要な農産物であり、その收穫は年産約五千萬石にのぼり、輸出量は平年その五割近くを示し、輸出量の多いことに於いて世界第一である。戦前輸出の過半は、インドとセーロンへ向けられてゐた。

石油はエナシジャン油田を中心として、イラワジ川の中流各地から産出する。鉛及び亜鉛は主に北シャン地方のボードウィン鉱山から産し、石油と共に東亞全體から見て、重要な産物である。南東部からはタングステンや錫の産出もある。

住民は大部分がビルマ人であるが、インド人も少くない。華僑は比較的少く、その代りにインド人の商業的勢力が強い。

マライと昭南島 マライ及び昭南島の地理的位置が極めて重要なことは、改めていふまでもない。マライの北部四州は最近タイ領に歸属することになったが、他の大部分はわが軍政下に置かれてゐる。

中央部から稍々西寄りを中央山脈が縦走してゐるが、高度は餘り高くない。氣候は熱帶性を

示し、南部は特に高温多雨で、季節的變化に乏しい。椰子・籐その他、熱帶植物が繁茂し、耕地のほかは一般にいはいゆるジャングルをなしてゐる。

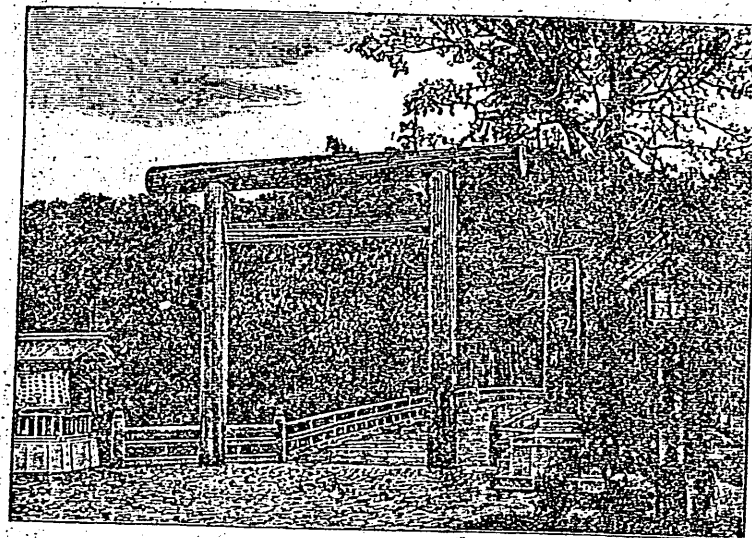
マライ及び昭南島から産出するゴムは最も重要な産物で、東インド諸島産のゴムと共に、世界市場を歴してゐた。この地方のゴムは、もとブラジルのアマゾン川流域の野生ゴムを移植して、栽培に成功したものである。

錫やボーキサイトはゴムと並ぶ重要な資源で、このうち錫は主に昭南島で製錬が行なはれてゐる。南方諸地方の錫をこゝに集めて、その製錬と貿易とを獨占してゐた。なほ昭南島は海・陸・空の交通上の要地であり、又、

南方に於けるわが國の大切な軍事的基地をなしてゐる。

マライと昭南島には、マライ人のほか、華僑・インド人その他諸地方の者が集つてゐる。わが國人は従来、栽培業・鑛山業及び水産業などに活躍して來たが、今後は更に工業その他の事業のほか、文化的方面にも十分の指導力を發揮することになるであらう。昭南島の列の上に建





てられた昭南神社は、天照大神が御祭神で、南方
全域の鎮護として崇められてゐる。

二 東インド諸島

東インド諸島は、北ボルネオとパプア（ニューギニア）の東半を除くと、大部分が約三百年間に互つてオランダの支配下に屬してゐた。大東亞戦争勃發に際して、オランダが米英側に加擔したため、遂に英領と共に、悉くわが軍の裁定するところとなつた。これによつて始めて、東インドはその本來の姿に返り、大東亞圈内で國防上、經濟上重大な役割を演ずることになつた。地上資源・地下資源の極めて豊かな地域であるが、ジャワその他を除くと殆ど未開發の狀態にある。今後これらの地域を開發して、各地住民の生活の安全と幸福を圖

り、ひいて大東亞建設に資することは、わが國に課せられた重大使命である。

東インド諸島は太平洋の南西部を占め、インド洋にも面し、且つアジアの大陸部と濠洲との間に介する重要な地理的位置を占めてゐる。

自然環境 東インド諸島は、世界にも類のないほど大小無數の島々から成り立つてゐるが、諸島嶼間に地體構造上の連絡があることは、既に學んだ。インド支那方面からスマトラ・ジャワ等の大スンダ列島を経て、小スンダ列島へ續く一大弧狀線に沿つて、多くの火山が列をなしてをり、中でもジャワには百餘の火山が分布してゐる。臺灣の山脈は、地質構造上フィリピンへ連なり、更に分れて、セレベス・モルッカ及びボルネオ方面へ延びてゐる。

氣候は大部分がマライと同じく熱帶性で、一年を通じて氣溫が高く、雨も全體的に多い。随つて植物の成長が極めて旺盛である。風の向きによつて乾季と雨季とに分れる所では、甘蔗や綿の栽培によく適する。海洋による調和と、日々のスコールなどによつて、大陸の内部に比べて氣候は割合凌ぎやすい。千米から二千米ぐらゐの高地は、氣候が快適で、これまで蘭人や英人が休養地として利用し、又、溫帶農産物の栽培地となつてゐる。氣候に對する馴化性の強いわが國人や華僑は、この地方の低地の氣候にも耐へて活動して來た。

この地方は低氣壓の襲來が比較的少く、貿易風のやうな恆風もある上、諸島嶼も散在してゐる。

るので、航空の發達には極めて好都合である。

住民・宗教 この地方の住民の大部分は、アジャ系のマライ族で、新インドネシヤ人とも呼ばれる。その代表の二つが、スマトラ山地から出たマライ人で約三百萬を數へる。かれらは古い時代からインド文化に影響され、海を渡つてマライ半島に居住し、その後次第に東インド諸島全體に勢力を伸ばし、貿易に従事しながら、新しい文化を傳播した。今から四、五百年ぐらゐ前回教に改宗し、且つそれを東インド全般に流布した。かれらの言語は商用語として、現在殆ど全諸島に通用してゐる。

このほかマライ族の主なものには、北スマトラのアチエー族、南セレベスのマカッサル族・ブキ族、北セレベスのミナハサ族、ジャワのジャワ族・スンダ族・マズラ族等がある。概ね回教を信仰し、文化が比較的高い。唯、回教の傳播以前、インド教・佛教が勢力を占めてゐた時代が、實に千餘年の長期に亘つたので、今日もなほ住民の生活の上に大きな影響を及してゐることを忘れてはならない。

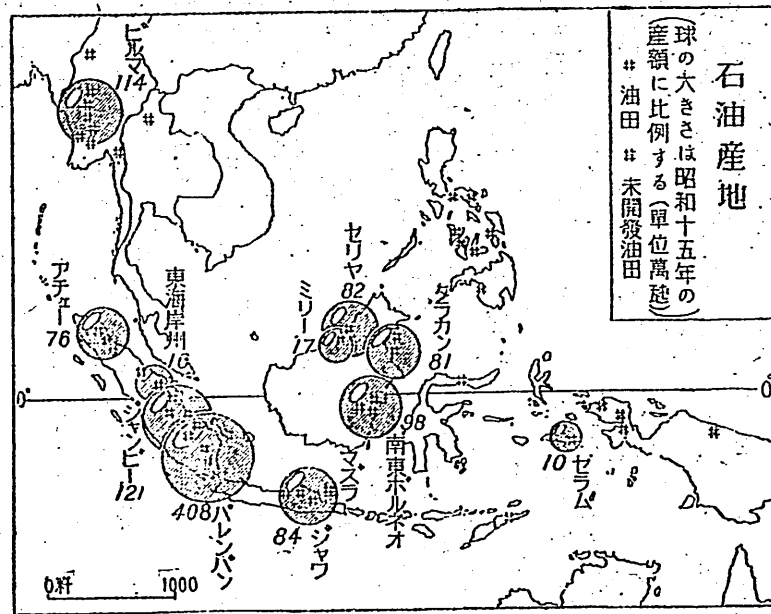
東インド諸島にはマライ族のほか、古インドネシヤ人とも呼ばれる少數の原住民も所々に住んでゐる。スマトラのバタク族、ボルネオのダイヤ族、セレベスのトラジャ族などがその主なものである。

地上資源・地下資源 東インド諸島は、ま

ことに資源の豊かな所である。自然的條件に恵まれて、農産物では、ゴム・甘蔗・規那・茶・コーヒー・ココア・煙草・カボック・玉蜀黍・ココ椰子・油椰子・胡椒等、甚だ種類が多い。水産業は從來は振るはなかつたが、各地に進出した邦人漁業者の活躍によつて、魚類の豊富なることが知られてゐる。

地下資源に於いても、大東亞に少い石油を始めとし、錫・ボーキサイト・石炭・鐵・ニッケルその他多種類のものが埋藏されてゐる。東インドは確かに大東亞の寶庫と呼ばれる名にふさはしい。

しかもこれらの豊富な産物は、地域的にはごく一部で生産されてゐるに過ぎない。開發



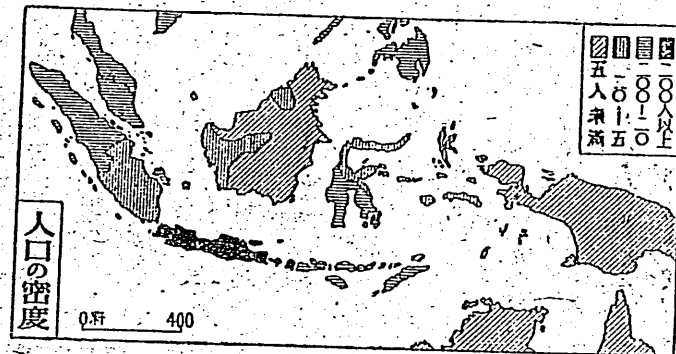
の十分進んでゐるのはジャワだけで、スマトラ・セレベスがこれに次ぎ、ボルネオその他は局

部的な地域を除くと、殆ど開發されてゐない現状である。

蘭人・英人はこれまでこの地方の資源を獨占し、各地住民を酷使して不當な利得を搾取してゐた。

主な島々 上の圖でわかるやうに、ジャワとマズラの人口密度は、他の東インドの島々と比べて特に高い。その主な原因としては、ジャワには利用に適しない低濕地が少く、肥沃な火山灰地域が廣いこと、氣候土から見ても比較的住みよいこと、住民が従順でよく働くこと、この地が早くから開拓され、物産が極めて豊富なことなどが挙げられる。土地は一體によく利用され、全土の四分の一は水田で、灌漑設備も整つてゐる。到る所に農園があつて、各種の重要農産物を産出する。いはばジャワは開拓し盡くされた島といった趣がある。

スマトラはマライ半島との間にマラッカ海峡、ジャワとの間にスンダ海峡を挟んでゐる。兩海峡は交通上極めて大切である。又、北西部はインド洋に突出し



て、アンダマン・ニコバル兩諸島と接近し、インド方面に對する戰略上の價值が甚だ大きい。パレンバンを始め各地に油田があつて、スマトラは南方諸地方中で産油量が最も多い。農園も所々に開かれ、ゴムはマライに次ぐ大産地である。

ボルネオはわが國よりも大きな島で、海岸の植民地を除き、内部は一大密林に覆はれてゐる。ボルネオ各地の石油の産出が、スマトラと同様重要なことはいふまでもない。又、東部ボルネオの炭田を始め、各種の鑛産も期待されてゐる。

セレベスは特殊な形狀の島で、島のどの地域も海に近いのが特徴である。氣候は多分に海洋の影響を受けて、各地共割合凌ぎよい。ニッケルや鐵鑛はボニ灣附近その他に發見され、有望とされてゐる。

モルッカ諸島は、ハルマヘラ島・セラム島その他の小島嶼から成り、フィリピンとバプアとの間の飛石のやうな位置にある。この地方は香料諸島の別名があり、こゝから産する香料は、早くからアラビヤ人などの手によつてヨーロッパへもたらされ、その原産地に對する慾望が、ヨーロッパ人の東亞侵略を誘起する一因となつた。

小スンダ列島は濠洲に對する要地をなしてゐる。その中の最も大きなチモール島は、臺灣ぐらゐの大ききで、濠洲北西岸との距離は僅かに四百軒に過ぎない。

パプアはわが南洋群島と濠洲との間にある世界第二の大島で、ボルネオより更に大きい。東にビスマルク諸島・ソロモン諸島等を控へ、戦略的に見て極めて重要である。到る所熱帯の密林に覆はれたこの島に、氷河をいたゞく高峰が聳えて、對照の妙を示してゐる。南側に廣い平野があるが、開拓はまだ一般に進まない。しかし農業や鑛業に於いては、將來甚だ有望である。

三 フィリピン

フィリピンはわが國と東インドの中間にあつて、兩者の連絡上特に注目すべき位置を占めてゐる。大東亞戦争以來、わが國の力により、住民は本來の面目を取り戻して銳意更生の一途をたどり、昭和十八年十月には永年待望の獨立を見るに至つた。かうしてビルマと同様、今日では大東亞圈の有力な一環となつてゐる。

ルソン・ミンダナオ・セブ・レイテ等を主とする大小七千有餘の島嶼から成つてゐるが、島嶼には互に地體構造上の脈絡がある。

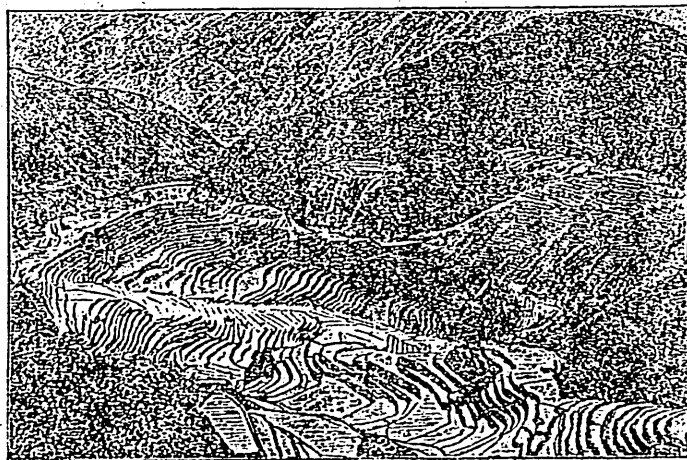
氣候は臺灣やインド支那とよく似通つてゐる。六月から十一月頃までの南西季節風によつて、島々の南西斜面はこの時期に雨季となる。他の季節には略々反對の風が吹いて、島々の北東側に雨をもたらし、地域により乾季と雨季とが比較的明瞭である。唯、南東部のミンダナオ島は、

一年を通じて雨が降り、颱風の被害も少く、特にマニラ麻の栽培に適してゐる。

住民・宗教 フィリピンの住民は、タカログ族・ビサヤ族を主として多くの種族に分れてゐるが、大部分は東インドと同じくマライ族で、それにイスパニヤ人・アラビヤ人・支那人その他の民族の血が混つてゐる。イスパニヤの領有時代約三百五十年間に、キリスト教が普及し、今日全人口一千六百萬のうち、約八割五分がキリスト教徒であることは、東インドと比較して注意を要する。

回教徒には、ミンダナオ島とスル島に居住する人口七十萬ばかりのモロ族がある。かれらはイスパニヤの統治時代を通じて反抗し続け、米領になつた後もやはり同様であつた。

米領であつた最近約四十年間に、浮薄なアメリカ文化が、廣くフィリピンの住民の間に浸潤し、本來の傳統が



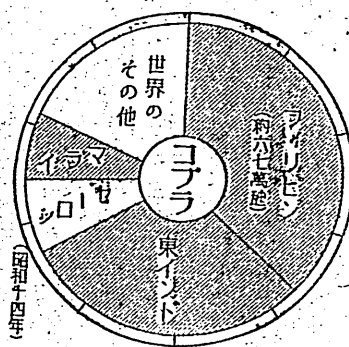
ルソン島の水田

覆はれてゐる觀があつた。しかし、民族的自覺によつて、更生する日も近いであらう。

地上資源・地下資源　フィリピンは甚だ農産資源に富んでゐる。甘蔗・コブラ・マニラ麻・煙草等が従來の輸出品の主要なものであつた。甘蔗はこの國の需要を満たす以外は、綿の生産に切り替へられ始めた。コブラは南方諸地方の生産が、世界の約七割を占めてゐるが、ルソン

島はその主産地をなしてゐる。マニラ麻は特産で、専らわが國人の努力の賜物である。

林業は農業に次ぐ重要産業で、總面積の約六割が有用な木材の産地をなし、ラワン材は特に有名である。長い海岸線を有し、漁業の根據地に適するこの國の水産業は、將來甚だ有望である。大東亞戦争前からダバオ・イロイロ等を根據地として、わが漁業者が活躍してゐた。



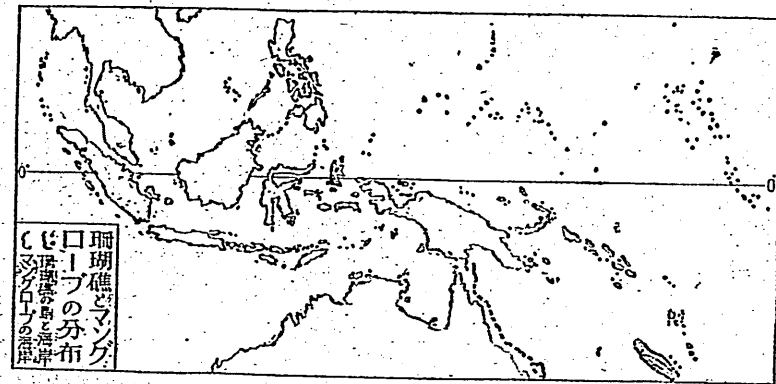
鑛産では從來金が最も重要であつたが、今日では銅・鐵・マンガン・クロム等が注目されてゐる。諸鑛山のうち、ルソン島のマンカヤンの銅、同じくマシシロックのクロム、ミンダナオ島のスリガオ鐵山などは、近時特に有名となつてゐる。

第四 濠洲、太平洋の諸島嶼、南極地方

濠洲は東インド諸島を仲介としてアジア大陸と連絡し、わが國とは赤道を挟んで相對してゐる。濠洲の南東海上には約二千軒を隔てて、ニュージールランドがあり、更に南太平洋上には、ニューカレドニア島・ソロモン諸島・ビスマルク諸島・ニューヘブリデス諸島・フィジー諸島・サモア諸島等が廣く全海域に互つて分布してゐる。北太平洋にもハワイ諸島その他、多數の島が散在してゐる。

太平洋の島々は、ミクロネシア・メラネシア・ポリネシアの三區に大別することができる。ミクロネシアは太平洋の北西部の島々で、小島群から成り、わが南洋群島はその主なものである。メラネシアはミクロネシアの南に續く、略々赤道以南の島々であり、ポリネシアはこれら二つの東に位する島々である。

島々の住民は永い間に、海流や風の力を借りて、島々に廣がつて行つたものと見られてゐる。近世に到り、ヨーロッパ人がこれらの地方へ侵入して來ると、平和であつた島民の生活は忽ち破壊され、多くの悲劇が各地に演ぜられた。その最も悲惨な例は濠洲で、百年餘の間に、百萬



人の原住民が僅かに五萬人を算するに過ぎない有様となつた。又タスマニア島では、明治九年に最後に生き残つた一人もなくなり、全島から原住民が全く失はれたのである。

濠洲やニュージラランド・ハワイ諸島等は、その面積も大きいので、生産地としても發達してゐるが、他の小さい島々は、寧ろ軍事上、交通上の據點として、極めて重要な立場にあることは、大東亞戦争の現實がよく證明してゐる。

島々が概ね高い火山島か、或はごく低い珊瑚礁から成つてゐることは、わが南洋群島の場合と同様である。上圖には、珊瑚礁やマングループが、赤道を隔てて南北諸地域に分布してゐることが示されてゐる。

一 濠洲

濠洲はクックの探検以來、英國の流刑植民地となつてゐたが、今から九十年ぐらゐ前に金鑛が発見されると、自由移民が殺到

し、その後農業・牧畜も盛大となつて今日に及んでゐる。しかし、人口密度は一平方軒一人にも満たない實情で、アジアの季節風帯に比べて餘りに懸隔が甚だしい。もつとも氣候の比較的良好なのは、南東部や南西の一部に過ぎないといふものの、他の地域に住民が住み得ないのでは決してない。即ちこれは、かれらの手前勝手な白人濠洲主義政策の結果であることを見逃してはならない。

自然と産業 濠洲は水平的にも垂直的にも極めて單調な陸塊で、南東部にオーストラリヤ山脈が連なるほかは、一大臺地をなしてゐる。中央低地はマーレー川とその支流のダーリング川の流域、及びその西方に續く鹹湖や内陸流域が主な部分である。

海岸も一般に單調であるが、山脈の迫る東海岸には小出入が比較的多く、シドニーのジャクソン灣を第一とし、すぐれた港灣が所々にある。北東の海上には、珊瑚礁が斷續して大堡礁をなし、南東にはバス海峽を隔てて、タスマニア島がある。

南回歸線が中央よりも稍々北方を通過してをり、濠洲の五分の二は熱帯に、他は溫帯に屬してゐる。雨量は風向・暖流・地勢等の關係で、東岸から北岸に互つて最も多く、南西部の地中海性氣候の地域がこれに次ぎ、内部に到るに従つて減少する。中央低地から西方臺地にかけては、氣候が著しく乾燥し、草地や沙漠が廣がつてゐる。植物帯はこの雨量分布に應じて、森林

帶から順次沙漠に移り變り、アフリカの場合と似通つてゐる。

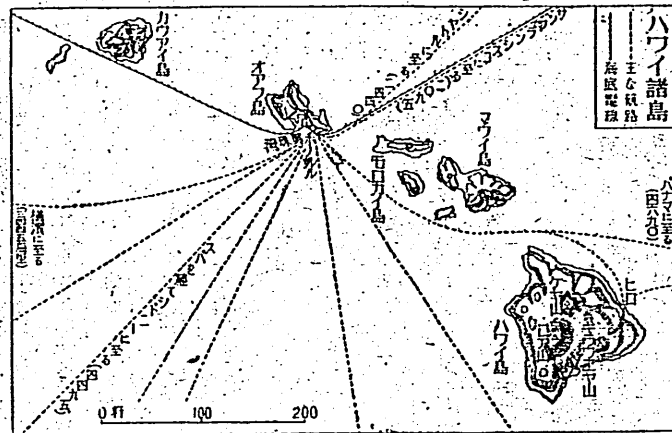
牧畜は濠洲の代表的な産業である。羊の数は約一億二千萬頭を數へ、世界の第一位を占めてゐる。元來牧羊は、極端な寒冷を伴はない比較的乾燥した氣候を必要とする。随つて北半球の溫帶、殊に蒙疆その他では、冬季に寒冷となり過ぎる缺點があるが、濠洲は牧羊に恵まれた地域が頗る廣く、大規模な發展を見るに至つた。良質な羊毛の産は、世界の約四分の一に及んでゐる。

牧牛もまた盛んであるが、その分布は既に學んだやうに、羊の場合と異なつてゐることが注意される。牛肉を冷凍し、又は罐詰としたものは、濠洲の主要輸出品の一つである。乳牛は東部の海岸地帯に多く飼育され、酪製品の生産も少くない。

農業のうち小麥の生産は著しく大であるが、分布は大體、雨量五百耗から七百五十耗の溫帶地域に限られてゐる。甘蔗の栽培は、東海岸のうち中部以北に多い。近海は魚類に富んでゐるが、水産業は一般に振るはない。アラフラ海の貝類の採取が知られるのみで、木曜島やブルームではわが國人がこれに従事してゐた。

鑛産は金のほか、石炭・亜鉛・鉛・鐵等を産し、中でも鉛や亜鉛は世界有數の產地となつてゐる。近時工業も發展し、米英の軍需兵站基地となつてゐることは注目に値する。

二 太平洋の諸島嶼



ニュージーランドは、大體、南緯三十四度から四十七度の間に位置し、溫帶性の良好な氣候である。南島の西側には氷河を流す高い山脈がある。この山脈と、卓越する西風との影響によつて、西側は多雨であるが、東側は乾燥する。羊や小麥は主として東側から産出する。北島には火山が所所に分布し、溫泉も少くない。乳牛の飼養は北島を主とし、一般に盛んである。原住民のマオリ族は、少數であるが氣魄に富み、りつばな人物も出てゐる。

ビスマルク諸島の中心は、ニューブリテン島の北端にある良港ラバウルで、カルデラが灣になつてをり、わが南方海上の重要基地である。

ソロモン諸島はツラギが中心で、ツラギ夜襲戰の行なはれた所である。ガダルカナル・ニュージョージヤ・ブーガ

ンビル等はいづれも新戦場である。

ニューカレドニアは珊瑚海の南東部にある細長い島で、ニッケルその他の鉱産資源の産地として名高い。

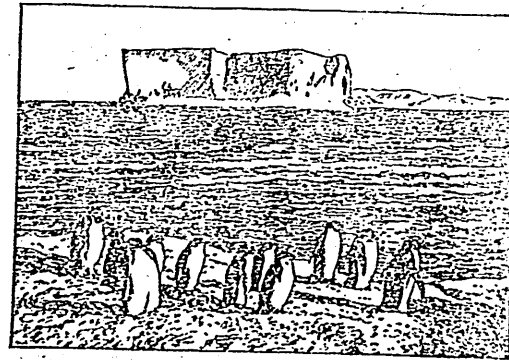
ハワイ諸島は多くの火山島から成り、総面積はわが四國ほどである。近海には四千米の深さの所があり、ハワイ島の如きは、その深海から海上四千米の高さに火山が噴出してゐる。

眞珠灣のあるオアフ島を中心とするこの島々の戦略上の價值に就いては、今更述べるまでもない。前頁の圖はホノルルの太平洋に於ける交通上の地位をよく示してゐる。

わが南洋群島の近くにあるナウル島とオートシャン島とは、共に燐礦の産地として有名である。

三 南 極 地 方

太平洋の南に續く南極地方は、探檢の結果、一面に厚い氷河に覆はれた一大高原であることが明らかにされた。北極地方と違つて、その周圍は廣く大洋に開いてゐるが、唯、南米大陸の



南極の氷山

南端は最も近く本地方の一角に迫つてゐる。

高原上には三千米、四千米の高い山々が聳え、ロス海の沿岸には、エレブス活火山が氷雪の中から噴煙を上げてゐる。海岸には氷壁が連なつてをり、沿海には卓狀の氷山が浮かび、その上にペンギン鳥が群棲してゐる。附近の海には鯨が多いので、これまでわが國やノルウェー、イギリス等の捕鯨船が大いに活躍した。

こゝ數十年來、この地方の探檢が盛んとなり、各探檢隊によつて、それらの地名がつけられた。わが白瀬中尉による大和雪原の名も、この高原の一部にとゞめられてゐる。

第五 インド・西亜

インド及び西亜は、アジアの南部から南西部に互る地域で、その大部分はインド洋に面し、一部分は地中海に臨んでゐる。これらの地域は、ヒマラヤから西の方ヨーロッパに續く東西の山脈によつて、アジアの他の地域と自然的に境され、風土・生活・民族・文化・宗教等に於いて、おのづから他と異なる特色をもつてゐる。

インド及び西亜は古代文化の榮えた所で、殊にインド文化はアジアの各地方に深い影響を及してゐる。世界の主な宗教である佛教・回教・キリスト教・インド教等は、總べてこの地方に興つて廣く各地に傳播した。佛教の興つたインドでは、今日インド教が最も優勢で、回教がこれに次いでゐるが、インド以西では殆ど總べてが回教徒であり、世界の回教圏の中心地となつてゐることは、文化的にも政治的にも注意すべきである。又、西亜は古來、亞歐の漸移地帯として重要な役割をなしてゐる。

一 インド

インドは、南のインド半島から北のヒマラヤ山地に至る廣大な地域を占め、その面積は略支那本部に等しい。インドの四周を見るに、北境には世界で最も高峻雄大なヒマラヤが連なつて、無比の天嶮をなし、西のイラン及び東のビルマとの間も山脈によつて隔てられ、南はインド洋を控へてゐる。このやうに、インドは地勢的にまとまりのある一大地域を形づくつてゐる。しかも、そこが大陸部に於ける廣い熱帶地であることは、インドの自然環境に於ける特殊性を顯著にしてゐる。熱帶の景觀を示す大平原のかなたに、千古の氷雪をいたゞく連峰を望むところに、インドの風土的性格がよく現れてゐる。

インドは三角形をなすインド半島と、ガンジス川からインダス川の流域に廣がるインド平野及びヒマラヤ山地との三つの大きな自然區域に分けることができる。

インド半島はデカン高原と呼ばれる東に傾いた一大高原で、多くの川は深い谷を刻んで急流をなし、ベンガル灣に注いでゐる。北西部には廣い熔岩臺地があり、半島の南端に近くセーロン島がある。

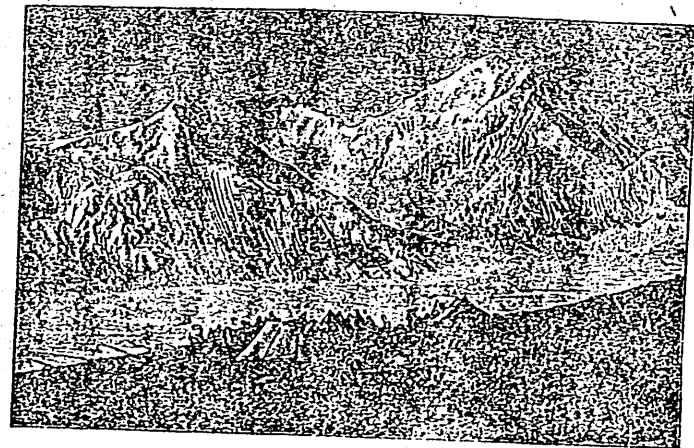
インド平野はインドの産業・交通・文化等の中樞地區をなし、人口もこゝに密集してゐる。平野の大部分はガンジスの流域に當り、ブラマプトラ川を始め無數の支流が、用水路・運河等と相俟つて複雑な水路を作り、豐饒な農耕地に於ける灌漑・水運の便を與へてゐる。下流には

大きな三角洲が発達してゐる。インダス川は中流のパンジヤブ地方の水を集め、乾燥地を流れてアラビヤ海にはいる。ガンジス川に次ぐ大河で、上流地方には耕地が開けてゐる。

ガンジス・インダスの水源地をなすヒマラヤは、インド平野とチベット高原との境界に弧状を描いて横たはる大山脈で、そこには世界最高のエベレスト山を始め、八千米以上の高峰が聳えてゐる。ヒマラヤ山地は、暑熱の烈しい平野地方とはおのづから違つた氣候を呈し、高度による植物相の變化がよく現れてゐる。

季節風の影響 熱帯性のインドの氣候に、周期的變化を與へるものは季節風である。アジアの季節風帯のうちでも、インドほど季節風が顯著で、且つ大規模な所はない。随つて、農業その他生活のあらゆる方面に大きな影響を與へてゐる。

大體六月から十月頃まで南西の風が吹き、インド洋の



(八十五)

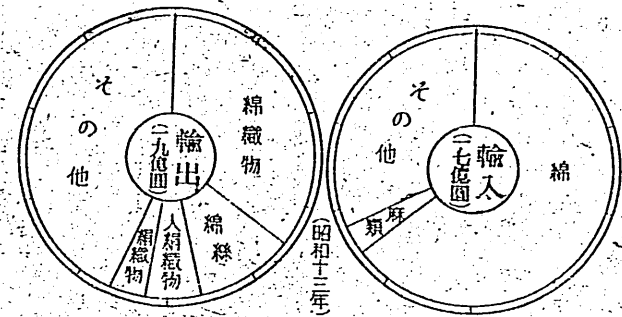
濕氣を運んで來るので雨が多く、この期間がインドの雨季である。殊に六月から九月頃までの風が烈しく、この間に一年中の雨の大部分が降る。中でも北東部のアッサム地方を第一として、インド半島の西岸地帯やセーロン島の南西部なども甚だ多い。しかし地形の關係で降水量が地域によつて非常に違つてゐる。インド半島の内部は降雨が少く、灌漑用の溜池が発達してゐるし、北西部の平野は一層雨が少く、乾燥地となつてゐる。

雨季に雨が少かつたりその時期が後れたりすると、直ちに農作に支障を來たし、時には大きな被害を與へる。インドでは住民の大部分が農民であり、しかも英國の植民政策によつて、一般に貧困な生活を營んでゐるので、凶作の場合には屢々大規模な飢饉が起る。

十一月から五月頃までは北東の季節風が吹く。内陸から吹いて來る乾燥した風であるから、この時期には雨が少く乾季となる。インドでは四、五月頃の暑氣が最も烈しく、家の戸や窓を締めて暑熱を防いでゐる。

地上資源・地下資源 高温多雨の氣候は米作によく適し、アジアの季節風帯に於ける米の大産地である。普通三期作が行なはれるが、國內の消費が多いので、一部をビルマから輸入しなければならぬ。殊にガンジス・ブラマプトラ川の流域は米作が盛んで、下流の三角洲平野はその中心である。

インドの特産物であるジュートもこの三角洲平野が主産地で、世界の産額を殆ど獨占し、それが國の對インド貿易の大きさは貿易額に比例する



の製品と共に海外へ多量に輸出される。デカン高原北西部の熔岩盛地を主産地とする綿や、インダス川中流の雨の少い地方を中心として、灌漑によつて作られる小麥も世界的産額を示してゐる。綿は戦前までは、わが國へも多量に送られたことは上の圖が示す通りである。ボンベイやマドラスは綿の主な輸出港である。小麥は一部カラチから輸出されるが、大部分は國內で消費される。近年ボンベイの綿工業や、カルカッタの製麻工業を始め、各種の近代工業も興つてゐる。インド平野は甘蔗の栽培も盛んで、甘蔗糖の産額は世界第一であるに拘らず、人口が多いので、略々その需要を満たすくらゐである。アッサムの丘陵地やセーロン島には、大規模な茶園があり、製茶業も盛大で、主として紅茶に製せられる。茶の産額も世界の首位を占め、重要な輸出品として英國その他へ送られる。煙草・茶種・大麻・玉蜀黍等の産も少くない。

農耕用・運搬用として黄牛や水牛が多く飼育され、牛の頭数は、山羊と共に世界第二である。

又、羊・駱駝・象等も多く、随つて皮革や羊毛の産が少くない。

デカン高原には石炭・鐵礦を始め、金・銀・銅等種々の礦物を産するが、産額はいづれも多くない。しかしマンガンや雲母の産額は、セーロン島の黒鉛と共に世界的である。インダス川上流には石油を産する。炭田地方には製鐵業が興り、銑鐵はわが國へも輸出された。石炭のほか、灌漑用の大貯水池を利用する水力電氣を動力源として、近代工業も發達して來た。

住民・宗教 インドは人口約三億八千萬、支那と共に最も人口の多い土地である。殊にガンジスの下流地方が最も稠密であり、半島東岸の狹長な海岸地方がこれに次いでゐる。

住民の約七割はヒンズー族で、北部・中部に多く、インド教を信じてゐる。西部に多いトルコ・アラビヤ・イラン等の諸族は約八千萬を算し、回教の信者である。嘗て廣く分布してゐた先住民のドラビダ族は、ヒンズー族に追はれ、主に半島部の奥地に住んでゐる。

インドにはインド教・回教の二大宗教のほか、幾多の宗教があり、宗教上の對立が激しい上、いろ／＼の嚴格な階級制度や種々雑多な言語の相違などが、國民的統一に障礙となつてゐる。インドに興つて綿爛たる文化を生んだ佛敎は、所々にある遺跡によつてもそれをしのぶことができる。しかし今ではセーロン島を除けば、インドでは殆ど行なはれてゐない。

インドほど、社會の各方面に互つて宗教的影響の著しい所はなく、國民の思想も生活様式も

風俗・習慣も、その他あらゆる點にその色彩が濃厚に現れてゐる。随つて宗教を度外視してインドを考へることはできないといつても、過言ではない。

農業を主體としてゐるインドでは、老大な人口の土地にしては大都市が少い。最大都市のカルカッタが約百三十萬、これに次ぐボンベアの約百二十萬が特に大きく、他は五十萬以下である。政廳の所在地デリーは、ガンジス川に臨む古い都である。半島部の海岸にある港町の中には、ポルトガル領やフランス領があつて、嘗て兩國がインドに勢力を扶植した當時の名残りとよめてゐる。

わが汽船はカルカッタ・コロンボ・ボンベア等に定期に寄港し、織物類・雜貨等をこの國に送り、綿・銑鐵・麻袋等をわが國へ輸入した。

鐵道はカルカッタ・ボンベアを起點として廣く普及し、各地の都市を連絡してゐる。インドは支那と比較して遙かに鐵道の便が開けてをり、支那では幹線が南北に走つてゐるのに對して、インドでは主要な線は寧ろ東西のものが多い。

インドと英國 今から四百五十年ばかり前、バスコダガマが始めてアフリカを廻航して、インド半島の南西岸に到着して以來、ポルトガルは、インドの海岸の要地を占據して勢力を扶植して行つたが、それから百餘年の後、インド貿易に乗り出したオランダ・イギリス・フランス

等の西歐諸國は、それ／＼インドに活動の根據地を占めて、次第に利權の獲得、領土の侵略を企てるに至つた。さうして互に武力的衝突を繰り返すうち、漸次英國が優勢となり、遂に他の勢力を驅逐すると共に、インドを約三百年間に互つて統治したムガル帝國をも滅した。こゝに全インドは英國の主權に隸屬すべき悲運に立ち到つた。以來今日まで約百年の間、インドは英本國の繁榮を築くための搾取の對象となり、かれの寶庫として、その豊富な資源と勞力とを提供せざるを得なかつた。

英國がその多くの領土中でも、インドをいかに重視したかは、本國からスエズ運河を経て東亞に至る通路を確保するに腐心したことによつても明らかで、通路に當る要所要所を防衛の據點として手中に收めたのは、第一にインドを守る目的のためであつた。

インドとベルチスタンを含んでインド帝國と呼ばれ、イギリス王がインド皇帝を兼ね、總督を派遣して統治してゐる。又セーロン島は別に英本國の直轄地とされてゐる。

インドの最近數十年間は、民族運動の歴史といつてよい。反英の氣運は獨立運動と結んで、年と共に熾烈となり、英國のあらゆる抑壓手段にも拘らず、その勢は全土に波及してゐる。英國はインドが從來宗教的反目や種族的、階級的對立等のために、國民的團結が不十分であつた點を巧みに利用した離間策によつて、民衆を統制することに努めた。しかし大東亞戰爭の勃發

は、インドの獨立運動に甚大な刺激を與へ、全住民は宿望の達成を望んで動搖してゐる、英國の羈絆を脱して大東亞共榮圈に参加する好機はまさに到來した。

二 西 亞

インドの西に連なり、地中海・紅海の沿岸に至る間の地域を占める西亞は、アジアとヨーロッパの漸移地帯に當つてをり、アフガニスタン・イラン・イラク・シリア・パレスチナ・アラビア・トルコ・コーカサス等の諸國・諸地方に分れてゐるが、地勢・氣候の特色や、それに伴ふ特有の人文現象などによつて、共通性のある一地區と見なすことができる。

自然環境 バミル高原から西方へ延びる諸山脈の間に、イラン高原やアナトリア高原があり、又、南部には一大高原をなすアラビア半島があつて、地勢は概ね高原或は山岳地となつてゐる。唯チグリス・ユーフラテス川流域のメソポタミヤ平野が、唯一の廣い低地をなしてゐる。西亞はアジア内部から北アフリカに互る乾燥地帯の一部をなす非常に雨の少い地方で、乾燥地特有の景觀を呈してゐる。草原や荒地が多く、アラビアの大部分は沙漠となつてゐる。

一般に大陸性氣候を帶び、冬は多くの地方で降雪や霜を見るが、夏は炎暑が甚だしく、殊にアラビア方面は酷熱で、しかも晝夜の氣溫の差が著しい。唯、海岸地帯は概ね雨が多く溫暖で、

地中海方面では冬に雨が降る。随つて河水は豊かでなく、山地の雪融け水が主な水源となつてをり、イラン高原には海に出口のない川が多い。

人文の特色 西亞は過去に華やかな文化と強大な帝國の興つた地方である。メソポタミヤ平野は氣溫が高く、地味肥沃なので、灌漑によつて古代に農耕が開け、四千年以上前に既にバビロニア國が興り、バビロンに都してりつばな文化を築いた。この兩河の上流地方には一時アッシリヤが榮え、地中海沿岸ではヘブライ人やフェニキヤ人などが國を建て、大いに發展し、又イラン地方に興つたペルシヤ國は、強大な勢力を振るつて四隣を征服し、廣大な版圖を誇つた。

中世にはアラビアの遊牧民であつたサラセン族の勢が盛んとなり、猛威を逞しくして四方を侵略し、その領土は、東はインドの一部に、西はアフリカの北岸一帯を経てイベリヤ半島に及んだ。當時もメソポタミヤ平野がサラセン國の中心となり、バグダードはその都として榮えた。さうして、この國特有の文化は廣く各地に傳播した。次いで小アジア半島に據つたトルコが強盛となり、附近一帯を占領して、バルカン半島やエジプト・トリポリ等をも領有するに至り、その後永く亞歐及びアフリカに跨がる領土を保有した。しかし次第にその領土を失ひ、第一次歐洲大戰後は、殆どアジア以外の領土を喪失した。

ユダヤ教・キリスト教・回教等は、西亞諸民族の間に生まれた宗教で、そのうちキリスト教と回教は、佛教と共に廣く普及し、世界の三大宗教と呼ばれてゐる。

中でもアラビヤに興つた回教は、現在西亞の殆ど總べての住民に信奉せられ、なほインド・東インド諸島・アフリカ及び東歐などにも廣がり、世界に於けるその信徒の總數は三億以上に達してゐる。

西亞の住民と回教とは切り離すことのできない深い關係がある。西亞が回教圏の中心であることは、政治上、民族問題上、大きな意義をもつてゐる。嘗てサラセンやトルコが勢威を伸張した場合も、常にこの宗教の力が働いてゐた。

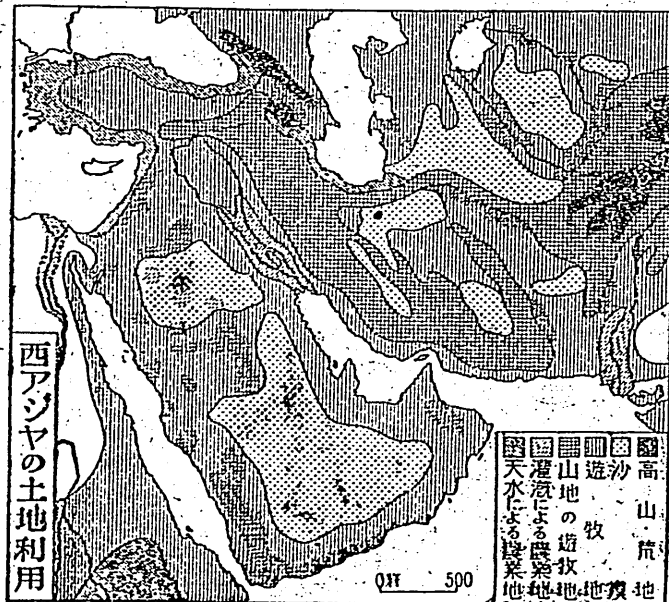
サウジアラビヤの首府メッカは、マホメットの生地であり、メジナはその歿した所で、共に回教の聖地として巡禮者が多い。又パレスチナの首府エルサレムは、キリストの墳墓の地として信徒が集る。

氣候が非常に乾燥してゐるので農業は一般に振るはない。山麓に多い泉地の附近で小規模に營むほか、井戸を掘り、或は遠くから谷水を引いて灌漑し、小麥・大麥・綿・煙草・阿片等を産する。果實には恵まれて、到る所に棗椰子を産し、又、葡萄・いちじく・さくら・オリーブ等がよく實のる。

牧畜にはよく適するので廣く行なはれ、遊牧生活を營む者も多い。羊・山羊・馬・駱駝等が各地で飼養されてゐる。

古來この地方は遊牧が盛んで、剽悍な遊牧民が、屢々インド・メソポタミヤ・エジプト等の農業地に侵入したことは、支那と北方民族との關係に類似してゐる。

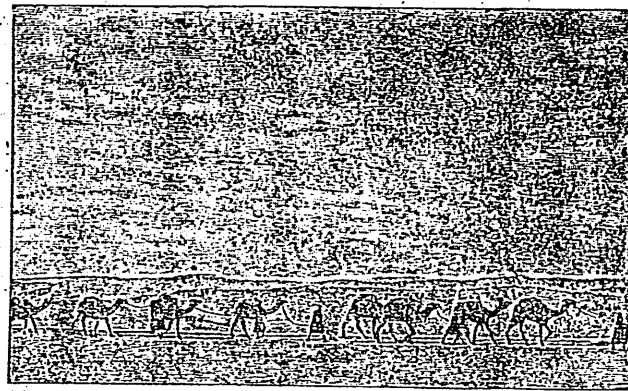
西亞が石油の産地であることは特に注意すべきで、イランのペルシヤ灣沿岸からチグリス川流域にかけての地方や、カスピ海の南岸やコーカシヤ地方には、主要な油田がある。殊にバクー附近の油田は産油量が多く、送油管によつて黒海沿岸のパツームに送られる。コーカシヤ地方の油田が、ロシヤの近代工業の發達に重要な關係をもつてゐることはいふまでもない。



イラクの石油採掘はイギリスが經營してゐる。モスルやバグダードの附近は油田の中心地である。イランの石油は、英・米等の資本によつて採掘されてゐる。奥地の油田地帯からは、黒海やベルシャ灣岸へ送油管を通じてゐる。なほコーカシヤ地方のチフリス附近を中心として、製鐵に必要なマンガンの産出が多い。

西亞は一般に人口が稀薄で無人の荒野も廣い。稍々密な所は小アジアの沿岸地帯である。各地の主な都市は大抵首府であるが、人口約四十萬のテヘランが最大の都市で、約三十萬のバグダードがこれに次いでゐる。アラビヤ半島南端のアデンは、交通の要路に當り、英國の軍事的要地である。

鐵道の便は甚だしく、一部には自動車路も開かれてゐるが、今なほ昔ながらの隊商が往來する。アジア・ヨーロッパ・アフリカの接觸地帯に當るこの地方の隊商は、古來文化の傳播に大きな役割を果してゐる。ボスポロス海峽に臨むスクタリからバグダードを経て、ベルシャ灣岸のバスラに達するバグダード鐵道は、ヨーロッパの幹線鐵道と



連絡し、政治的に極めて重要である。

過去の華やかな歴史をもつに拘らず、今日の西亞諸國は、國勢が一般に振るはず、英國・ソビエト聯邦・フランス等の勢力に壓迫されてゐるものが多い。しかし近年トルコでは國內諸般の革新に努め、又、從來英國とロシアの緩衝地帯とされたイラン・アフガニスタンも國力の充實を圖り、他國の勢力を排除することに努力してゐる。シリア・パレスチナ・アラビヤ方面のアラビヤ人は、屢々英國に反抗し、騒亂を起してゐる。戦前はわが商品の販路が次第に西亞地方に廣まつてゐた。

第六 シベリヤ・中亞・北極地方

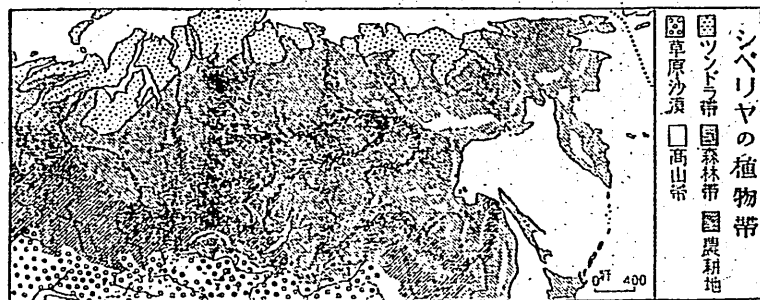
シベリヤ及び中亞はアジアの北部一帯に互る廣大な地域を占め、その面積はアジアの約三分の一に當つてゐるが、人口はわが國の四分の一にも足りない。随つて、人口は極めて稀薄である。

シベリヤ及び中亞はコーカサス地方と共に、アジヤロシアと呼ばれ、多くの共和國や自治區域に分れてゐるが、一括してソビエト聯邦の一部を構成してゐる。

西はヨーロッパと地續きて、低いウラル山脈のほか、著しい自然的境界がない。北と東は廣く海に面してゐるが、北極海沿岸は一年の大部分が凍結し、太平洋岸も冬には凍結するので、この方面の港にとつて不利である。南はバミル高原から派出した山脈や、バイカル湖附近から黒龍江上流にかけての山地によつて、アジアの他の地域と境してゐる。

一 シベリヤ

ロシア人は早くからウラル山脈を越えて漸次東方へ進出し、諸要所に部落を作り、道を開い



てシベリヤ侵略の歩を進め、遂に三百年ぐらゐ前に太平洋岸へ達した。こゝにロシア人によるシベリヤ經營の端緒が開かれた。この地方には原住民は僅かであつたから、かれらの前進をはゝむものは、千古の大森林と凜烈な寒氣とで、いはば自然との闘争であつた。

その後ロシアはシベリヤを流刑植民地として開拓を進めたが、又一方、この地方には寒帯性の針葉樹の大密林が廣く連なつてゐて、そこには狐・てん・りす等の毛皮獸が棲息するので、これらの貴重な毛皮を得るためにはいり込む者も多くなつた。毛皮はシベリヤの重要な産物の一つで、シベリヤ鐵道沿線以北の高緯度の地方にある都邑は、毛皮取引のため發達したものが多し。南東部山地の各地で發見された砂金もまた人々を引きつけた。これらはいづれもシベリヤの開拓に與つて力がある。

しかし何といつても、シベリヤの發展に最も大きな影響を與へてゐるのは、明治の後期に開通したシベリヤ鐵道で、その産業上、交通上に於ける大きな役割はいふまでもなく、軍事上、政治上の意義は極め

て重大である。

自然と産業 シベリヤは大體北緯五十度以北の高緯度の地方である上、暖海の影響を受けることが少いので、冬の寒さが厳しく、地面は凍結する。シベリヤの北東部は、世界で最も寒い地方といはれてゐる。しかし夏は晝が長くて相當に暑く、著しく大陸性氣候の特色を呈してゐる。殊に寒冷な中部以東では、鐵道の沿線の一部を除いては土地の開墾が進まない。しかし西へ行くに従つて氣溫が高まり、オビ川上流の廣い草原地帯は地味も極めて肥沃であるから、シベリヤの主な農耕地となつてゐる。麥類・馬鈴薯・甜菜等の産額が多く、又この地方では馬や牛の牧畜も盛んである。近年これら農・畜産物を原料とする製粉・醸造・精肉等の工業も興つてゐる。オムスク・トムスク等は、この農牧地帯の中心地である。

林業はまだ發達してゐないが、大森林の存在は、將來の利用を待つばくだいな天然資源といふべきである。

トムスクの南に當るクズネツク附近の炭田を始め、サヤン山脈北麓の所々に豊富な炭田があり、又この地方からバイカル湖附近にかけては、鐵礦の産出も多い。ロシヤは産業五箇年計畫によつて、エニセイ川上流に於ける水力發電の開発を盛んにし、石炭の利用と相俟つて、附近一帯に金屬工業や化學工業などを勃興せしめた。黒龍江沿岸にも所々に炭田が發見され、工業

も興つてゐる。南部の山地には各地に金を産し、銀や銅も少くない。

北樺太には東岸に油田があり、西岸に炭田があつて、わが國は最近まで、それらの採掘權をもつてゐた。樺太附近からカムチャツカ半島沿岸にかけては、鮭・鱈・たらば蟹等の漁獲が甚だ多く、わが國が沿岸の漁業權を有し、出漁も盛んであることは既に學んだ通りである。ペトロバロフスク・ニコライエフスク等は漁業の根據地である。

シベリヤ鐵道とその沿線 シベリヤの門戸であり、且つ重要な軍港であるウラジオストクを起點とし、ハバロフスク・チタ・イルクーツク・ノボシビルスク等を経て、ヨーロッパに至る鐵道を普通シベリヤ鐵道と呼んでゐる。シベリヤの主な都市が殆どその沿線にあり、又シベリヤの産業地帯が沿線を中心としてゐることを見ても、この鐵道の重要性がわかる。

シベリヤ鐵道の開通はシベリヤの開發史上一時期を劃するもので、鐵道が一地方の發展に及ぶ影響を見る上に、シベリヤ鐵道の場合ほど著しい例は他に少い。ロシヤのシベリヤ經營は、この一條の長大な鐵路を中軸として展開されて來た。滿洲の幹線鐵道とも連絡し、わが國から歐洲に至る唯一の陸上交通路である。シベリヤ鐵道から分れて中亞に通ずる鐵道もあり、又、最近ではシベリヤ鐵道の北側を、これと平行して日本海沿岸に達するバム鐵道の建設も進められてゐる。

近年、ロシア本國とシベリヤ及び中亞とを結ぶ航空路も發達し、その東端は沿海州や樺太・カムチャツカに達し、わが國の北邊に迫つてゐる。

シベリヤは樺太及び朝鮮に於いてわが領土と境し、更に滿洲とは長い國境線によつて接してゐる。わが國とシベリヤとが、軍事・政治・交通等に於いて、從來密接な關係にあつたことは、これまでの歴史がよくこれを證明してゐる。

二 中 亞

西シベリヤ平原の南西に續く中亞は、亞歐の交界地帯に當る内陸地域を占め、南東部の高地帯を除けば、大部分が低平な草地や沙漠をなしてゐる。降雨は甚だ少く、大陸性氣候の特色が著しい。

シベリヤの住民が殆どロシア人であるのに反して、この地方の住民の大部分は回教徒のトルコ族であつて、幾つかの種族に分れ、それらの共和國を作つてゐる。

アム川・シル川の沿岸や泉地など、灌漑の便のある所では、綿・麥類・甘蔗・葡萄等の栽培が行なはれる。主な産業は牧畜で、羊・山羊・馬・牛等を飼ひ、廣く遊牧生活を営んでゐる。近年ロシア農民の移住が多くなつて、農業が次第に盛んとなつて來た。

この地方を貫通して、シベリヤやロシア本土に達する鐵道が開かれてゐるが、今なほ隊商による貿易が續いてゐる。サマルカンドやタシケントは隊商の集る代表的な泉地の都市である。この二市を始め、南部の山地附近には古い都市が多く、中亞は古代から支那とヨーロッパとの貿易の通路に當つてゐたので、これらの都市が榮えたのである。近時山地附近の都市には近代工業も興つてゐる。

近年モスコと中亞の諸都市とを結ぶ航空路が開かれたが、これは鐵道の建設と共に、この地方を足場とするロシアの南下政策を反映するものとして注目される。

三 北 極 地 方

北極地方はアジアとヨーロッパ及び北アメリカによつて圍まれた地方で、北極海がその大部分を占め、大陸の沿岸には島嶼が多い。北極海は堅氷によつて鎖された深海であり、沿岸の低地はツンドラ帯をなし、山地には氷河が廣い面積を占めてゐる所もある。植物はこけ類のほか見られないが、動物には鯨・あざらし・北極熊・北極狐等が多く、捕鯨も行なはれてゐる。

住民はグリーンランドやカナダ北部の少數のエスキモー人と、ノルウェー領スピッツベルグの石炭採掘に従事するものが住んでゐるくらいである。

近年各國人によつて極地の探検が行なはれ、北極地方の氣象や地理も次第に明らかとなつた。ロシヤは最近漸くシベリヤの沿岸に沿つてベーリング海へ出る、いはゆる北東航路を開くことができた。又ロシヤは航空機によつて、北極を横斷して米國に達することに成功し、兩國間を結ぶ最短航空路の開拓が計畫されてゐる。

第七 太平洋・インド洋

自然環境 地球表面の約三分の二は海洋であるが、太平洋はその海洋の略々半ばを占め、大西洋・インド洋を合はせたものよりも廣い。

太平洋はその周邊を、アジア・濠洲及び南北兩アメリカの諸地域によつてめぐらされ、おのづから二大海域を形づくつてゐる。しかしインド洋との間は、東インド諸島中の諸海峡によつて結び附いてをり、兩者の連絡は甚だ便利であつて、大西洋が自然的に他の大洋と隔離してゐるのと趣を異にしてゐる。随つて、面積に於いて太平洋の半分にも達しないインド洋は、大きく見れば太平洋に従屬するものともいへるのである。單に海の連絡からのみでなく、兩海洋をめぐる地域に於ける山脈の續き具合や、季節風の關係などからも兩者の連絡が認められる。

環太平洋造山帶は、日本列島を貫ぬいて、一方ではアリユーション列島を経て、北米・南米の長大な山脈に續き、他方では臺灣からフィリピン群島を経て、パプア・ニューギニアに及び、完全に太平洋を取り圍んでゐるが、更に一脈はフィリピン群島から東インド諸島・インド支那を通つてヒマラヤに續き、更に西方へ延びて、地中海地域に及んでゐる。

この造山帯に沿つて火山帯及び地震帯が通つてゐるので、太平洋の周辺地帯には、わが國を始め各地に火山が分布してをり、且つ地震も頻繁に起る。又この造山帯の前縁には、所々に深い海溝がある。日本海溝には九千米以上の深所があり、フィリピン海溝には、深度一萬米を超える所があつて、世界の最深所となつてゐる。その他の列島の外側にも概ねこのやうな海溝を伴なつてゐる。かうして太平洋は平均の深さに於いても三大洋中第一で、平均深度は、大西洋・インド洋が共に四千米未満であるのに、太平洋は約四千三百米である。

三大洋には各々別箇の海流があり、暖流と寒流とが互にその流路に當る沿岸の氣候に影響を及してゐる。黒潮は太平洋最大の海流で、世界でも大西洋のメキシコ灣流に匹敵する大きな暖流である。その支脈と共にわが國や北米沿岸の氣候に少からず影響を與へてゐるばかりでなく、漁業に深い關係があることはもちろんである。寒流には親潮があり、その流路に當るカムチャツカ・千島の近海や、オホーツク海方面は、わが北洋漁業者の活躍舞臺として有名である。

世界第一の水産國であるわが國の近海では、太平洋や日本海その他に於いて、海流と魚類の回游路の調査が進められ、わが國水産業の發達に資せられてゐる。海流の調査は水産業や航海のために大切なばかりでなく、又、軍事上極めて重要であることに注意しなければならぬ。いづれにしても、太平洋からインド洋へかけての海洋に關する各方面の調査・研究は、わ

が國にとつて將來益々必要である。

島々と歐米人 太平洋がインド洋或は大西洋と異なる一つの特色は、廣大な海面に互つて、多くの島々が廣く分布してゐることである。インド洋では、マダガスカル島とセーロン島が特に大きいほかは、いづれも小さな島々で、その數も太平洋に比して遙かに少い。太平洋ではミクロネシア・メラネシア・ポリネシアに屬する大小無數の島々が赤道の北にも南にも散在してゐる。それらが珊瑚礁から成る低島か、火山島その他から成る高島に分けられることなどは、既に學んだところである。

太平洋の島々にはヨーロッパ人が始めてこの海へ乗り出して來た時代よりも、遙かに古い時代から既に原住民が居住してゐた。かれらは獨木舟カヌーを使用し、海流や風を利用して、島から島へ廣がつて行つたものと想像される。その後永い間に、互に遠く隔たつた島々では、それぞれ特有の生活が營まれ、自然に風習・言語その他に於いて、いろいろの相違が生ずるに至つたものと思はれる。

今から四百年餘り前、マゼランが太平洋を東から西へ横斷して以來、次第にヨーロッパ人がこの海へ現れ、最初はイスパニヤ人が海上に覇を唱へたが、やがてイギリス・フランス等の航海者もこれに加つて、盛んに活躍するやうになつた。かれらは各地の島を襲つて、掠奪したり、

或は原住民に種々の残虐を加へたりした。かうして平和であつた太平洋諸島には、次々に悲惨事が繰り返された。その後米國も、この海に足場を求めることに努め、英・佛等と共に、互に各島嶼を領有するに至つた。インド洋方面では、西歐人としてポルトガル人が最も早く活躍したが、その後オランダ・フランス・イギリス等が相前後して進出した。さうしてオランダは東インド諸島を手に入れ、又イギリスやフランスはインド洋の島々を獲得した。

兩海洋の重要性 このやうにして、わが國を除き、太平洋及びインド洋上の島々は、悉く歐米列強の占有するところとなり、又、兩海洋に面する地域も、大部分はその領土となつた。特にインド洋から南支那方面へかけての廣大な地域は、殆ど英國の勢力範圍であつた。明治二年、スエズ運河が開通して、インド洋の世界交通上の地位は著しく高まり、この運河の利權を獲得した英國のインド洋方面に對する政治・軍事及び交通上の支配力もまた大いに強化されるに至つた。

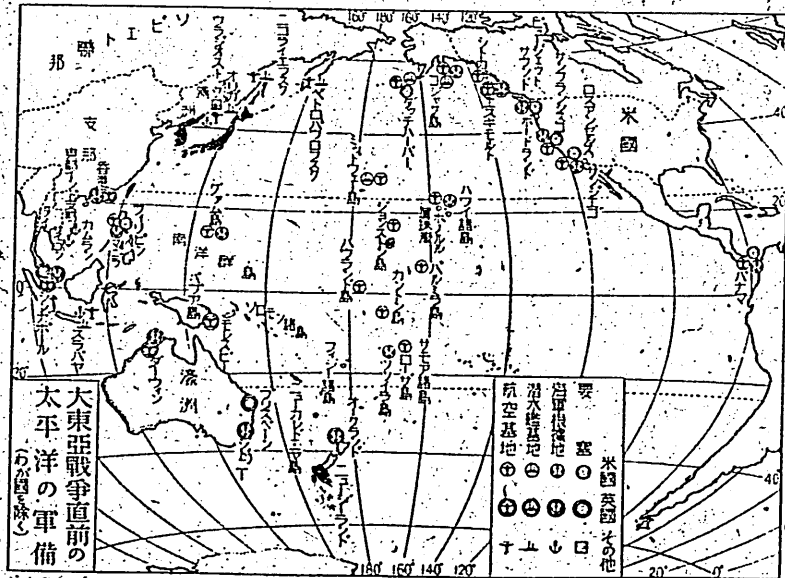
一方、太平洋方面に於いては、わが國の海運業の發展と、米國の東亞への關心が深まると共に、太平洋の交通は年々盛んとなつた。殊に大正三年に於けるパナマ運河の開通は、これに甚大な影響を與へ、こゝに太平洋は世界的活動の本舞臺として浮かび出る事になつた。

わが國は米國・カナダ・英國等を相手に海運界に健闘し、大いに新進の意氣を示した。太平洋

洋の交通が盛大に赴き、これを取り圍む諸國諸地方の關係が深まるにつれて、太平洋の政治的・軍事的重要性は増大し、かうして太平洋上に點在する渺たる小島嶼も、新たに重大な役割をもつて登場するに至つた。

島々は或は太平洋を横ぎる海底電線の中繼點として、或は定期航空路の發着地として選ばれ、又、中には海軍根據地・航空基地・要塞等の戰略的要地となつたものも少なくない。殊に太平洋制霸を企圖する米國の活動は最も積極的であつた。

米國は本土からハワイ・ミッドウェー・グアム等を経て、フィリピン方面へ至る海底電線を敷設し、又、大體これと同じ道筋によつて、太平洋を東西に横斷する航空路を開いた。



なほ一方では、アリウト・シャン列島・アラスカ及び本國の太平洋沿岸の各地に軍事基地を設けると共に、ハワイの眞珠灣を始め、太平洋の中央部に當るポリネシアの島々に、航空基地や海軍根據地を設けて軍備の強化に努めた。又、英國は濠洲並びにニュージーランドとカナダとの間に、海底電線や航空路を通じて、太平洋上を斜めに連絡し、その道筋に當る海上の支配に努めて來たが、現在では事實上、太平洋の海上權を米國に委讓してゐる。

わが國にとつて小笠原群島から南洋群島に至る防備線は、太平洋に於ける前衛線として重大な意義を有する。わが國は横濱から南洋群島や南方諸地方への航空路を開拓した。太平洋上の航空路は、そこに散在する多くの島々を足場として、將來大いに發展するであらう。戦時に際し、これらの島々が航空基地としていかに重要であるかは、改めていふまでもない。いはゆる不沈航空母艦の役割を果すのである。いづれにしても、島々が軍事據點として取り上げられる場合、その大きさや地形や位置などが重要な條件となることを注意しなければならない。

太平洋とインド洋の連絡路たる南方諸地方の海域は、從來米・英・佛・蘭等の勢力が交錯し、それ／＼自國領に海軍根據地を設けて利權擁護の據點とした。殊に英國はインド洋からこの方面へかけての制海權の確保に専念し、シンガポールや香港を東洋艦隊の基地として東亞政策の推進力たらしめた。

大東亞戦争によつてこれらの情勢は一變し、今や皇軍は南方の海上を制壓すると共に、アン・ダマン・ニコバル諸島にも進駐して、インド洋へも活躍の進路を開いた。

501
116

V.220.2

昭和二十一年一月十二日
文部省検査済



昭和二十一年一月十五日
昭和二十一年一月十九日
昭和二十一年一月三十日
印刷
刷
行
刷
行
刷
行

著作権所有

著者
發行者

文部省

中等地理三

定価金四十銭

翻刻
發行者

東京都神田區岩本町三番地
中等學校教科書株式會社

印刷者

東京都牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
大日本印刷株式會社
代表者 佐久間長吉郎

發行所

中等學校教科書株式會社

教科書番號 51ノ三

